『銃姫』

一・母の憂鬱

世田谷、大蔵―。
鬱蒼とした木々に囲まれた区道沿いの敷地の中に、その大きな病院があった。
「まあ、綺麗なお花だこと」
娘から受け取った花束を抱えて、澄江が嬉しそうにほほ笑んだ。オレンジ色の丸い形をしたガーベラは、澄江の大好きな花だった。
「ありがとう、朋佳」
ベッドから右手を差し出して愛娘の頬を撫でてやる。
「うん…」
朋佳は、子犬のような黒眼で一杯の大きな瞳を輝かして、嬉しそうに応えた。
「多恵さん。すみませんが、このお花を花瓶に生けてきていただけますか？」
澄江が、ベッドの脇の花瓶を指差して頼んだ。
「かしこまりました。ごゆっくり、どうぞ…」
多恵は、心得ていると言う顔で澄江に頷いて返した。
澄江が嫁に来る前からお手伝いとして働いている多恵には、彼女の言葉の意味が理解できていた。多恵が出ていくと、病室には澄江と朋佳の二人だけになった。朋佳は、幼稚園の帰りに多恵にねだってここへ連れて来てもらったのだ。幼稚園のある成城学園界隈からこの病院までは、さほど離れていなかった。
「ねえ、お母様。いつごろ退院できそうなの？」
見舞いに来るたびに、必ず彼女の口から出る質問だった。
「そうね、もう少しかな…」
「もう…、お母様の答えはいつもそれなんだから…」
予想通りのいつもと同じ澄江の答えに、いつもと同じように朋佳がほっぺたを膨らませて、不満気にして見せる。
「ほほほ…。そんなお顔をしたら、せっかくの美人さんが台なしですよ」
澄江が、もう一度愛娘の頬を撫でてやる。
彼女は、日ごとに自分の子供時代に似てくる娘が愛おしくて仕方がなかった。きっと彼女はこのまま美しい乙女に成長し、素晴らしい人生を謳歌してくれるのだろうと思えた。
ただ、ひとつだけ気がかりなことがあった。
「朋佳。お父様は優しくしてくれている？」
「う、うん…」
「本当に…？」
「本当は、わからない。だって、お父様とはあまり会わないから…」
「そうね、お父様は忙しい方ですからね…」
唯一の気がかりは、朋佳の父親の存在であった。

夫が相手に求める厳格さは、老若男女を問わないからだ。たとえ、それが自分の娘であったとしてもだ。
「朋佳は、お父様が嫌いなの？」
澄江は思い切ってそれを訊いてみた。
「そうだなぁ…」
朋佳は、その答えをどう表現しようかを一生懸命に考えているようだった。
だが、それで答えは充分だった。すぐに、答えられないこと、それ自体が答えだった。
幼い彼女が必死に考えなければならない程、父親との接点がないのだ。
「難しい質問をしてしまって、ごめんなさいね。無理に今答えなくていいのよ。あまり会わないから、答えが見つからないのよね？」
「うん、そうなの。どうしてもわからないわ…。お母様は、お父様のことが好きなの？」
「勿論よ。私は、朋佳のお父様のことが大好きですよ」
「そうなんだ…。どんなところが好きなの？」
「そうね。男らしくて、立派な方ですよ」
「ふーん。…優しい時もあるの？」
「ええ、とても優しい方ですよ」
「本当に…？」
朋佳は意外そうに訊いた。
「でも、いつも怖い顔をしているよ。朋佳は、お父様が笑っている所を見たことがないわ」
「ほほほ…、それは、お父様が心の中で優しくするタイプの方だからですよ」
「ええっ、そんなのがあるの？　でも、それでは周りの人にはわからないわ」
「ほほほ…。確かに、そうかもしれないわね。でも、むしろ男の人にとっては、その方が本当の大きな優しさなのよ。朋佳にも、きっといつかそれがわかる日が来ますよ」
「そうかなぁ…」
「それに、お父様はとても大きなものを背負っていらっしゃるから、なかなか人前で笑うことができないのですよ」
「そうなんだ。なんか可哀そうだね」
「ええ、そうなの。可哀そうな方なの…」
澄江がそれを噛みしめるように言った。
「ねえ、お母様。朋佳は、その大きなものを背負わなくてもいいんだよね？」
「何故、そんなことを訊くの？」
「だって、笑っちゃいけないのなんて嫌だもの…」
「こっちへ、いらっしゃい」
それを聞いた澄江は、不安気な様子の朋佳を自分の枕元に呼び寄せた。そして、彼女の手を握って真剣な眼差しで言った。
「いい、朋佳。これだけはよく覚えておきなさい。あなたの人生は、あなた自身が好きな道を選べばいいのよ。そして、いっぱい笑いなさい。わかりましたね？」
「うん。わかった」

二．別世界で

十六年後―。
東京、目白台―。
浅尾和孝は、目指す棟に向かった。
四年間通っている大学の構内だが、一番奥の西側にある部室棟には一度も行ったことがなかった。大学の部活動には入っていなかったからだ。目当ての弓道場は、地上にではなくその部室棟の屋上にあった。
エレベーターの最上階を降りると、すぐその前にがっしりとした造りの大きな木製の引き戸があった。その横には、筆書きで「学習院大学弓道部」と書かれたやはり木製の大きな表札がかかっている。
音をたてないように注意してその扉を開けると、いきなり目の前に別世界が広がった。
入口の玄関の先は一段高くなり、四十畳ほどの明るい色合いの木製床の射場になっている。そこから奥に向かって人工芝を敷き詰めた地面が続き、更に三十メートルほど先の方に的が見える。土を盛って造られた的場には、直径三、四十センチ程の太鼓のような丸い的が等間隔で八つ並んでいる。これが建物の上なのだとは、とても思えなかった。
三人の女性部員が練習をしていた。全員が弓道の袴姿なのですぐにわかった。一人は、矢を放つ動作に入っており、正座した二人が後方でそれを見ていた。
その時、和孝は、しまったと思った。
閉めた扉の音が、想像以上に大きく響いたからだ。だが、そう思った時にはすでに遅かった。案の定、その音を聞きつけて見ている方の部員の一人が慌てたように和孝の元へ走り寄ってきた。
「あのー。練習中なんですけど。何か…？」
小声ではあるが、強い調子で彼女が訊いた。
「音を立ててすみませんでした。ただの見学の者です」
配慮が足りなかったと、和孝は反省した。
「見学ですか…。でも、今は困ります」
彼女は迷惑顔で言った。
「どうしたの、原田さん？」
動作に入っていた奥の女性が、それを中断して彼女に訊いた。
「すみません、平沼先輩。一般の見学の方のようです」
「もう、原田ったら。朋佳が練習する時は、入り口に鍵を掛けておくようにって、いつも言っているでしょ！」
もう一人の座っていたショートヘアーの女性部員が、玄関の部員を叱った。
どうやら、叱られた原田と呼ばれた部員は後輩のようだった。明らかに、彼女が、動作に入っていた朋佳と呼ばれた女性に気を使っているのがわかった。
「はい、すみませんでした」
「いいのよ、美穂。私なら大丈夫だから」
平沼朋佳が振り向いて、ショートヘアーの女性に笑顔でそう言った。
その彼女を見た和孝は、一瞬言葉を失った。

白筒袖の上衣に濃紺の袴という出立ちが、絵に描いたように似合っていたからだ。それは、時代を超越したこの国の美しさだと思った。
「よろしければ、どうぞお上がりください」
何事もなかったように、彼女が笑みを浮かべて和孝に言った。
和孝は、そのひと言で彼女がどういう女性なのかがすべてわかったような気がした。
凛とした立ち姿の中に物腰の柔らかさを持ち合わせていた。その全身に品格が漂っていた。決してオーバーな表現ではなく、彼女こそが、俗にいう大和撫子なのだと思った。
「あ、ありがとうございます。それじゃぁ…」
原田に案内されて、和孝は一番奥の隅に腰掛けた。
朋佳が、弓を再開した。
矢を放ち終わるまでには独特の間合いがある。そのひとつひとつの動作、ふるまいにはそれぞれに深い意味がある。古より継承されてきた所作だ。和孝はその意味が知りたかった。それを知りたいが為にここまで来たのだ。そして、流れるような彼女のその自然で優雅な所作は、やはり例えようのない美しさだと思った。
弦が彼女の耳の後ろの位置まで引き絞られる。だが、微動だにしない。細身の彼女の体のどこに、それだけの力があるのだろうかと思う程であった。それは五秒以上続いた。
やがて、矢が放たれた。矢は、見事に三十メートルほど先の方の小さな的に突き刺さった。
一礼して弓を棚に立て掛けると、朋佳が和孝の元へやってきた。
「練習の真っ最中にすみませんでした」
和孝が、まず謝った。
「いいえ、鍵をかけ忘れたこちらが悪いのですから」
そう答える彼女は、あくまでも低姿勢であった。
「僕は、浅尾和孝です。経営学科の四年です」
「平沼朋佳と申します。英文科の三年です。女子弓道部の主将をやっています。今日は個別の練習日ですので、普段とは違って三人しかおりませんが…。でも、四年生の方ですと入部の為の見学ではありませんね？」
「はい、違います」
「それでは、何故見学を？」
「僕は、射撃競技をやっているのですが、弓道の所作がその参考になるのではないかと、急に思いたちまして…」
「射撃競技？…そういう部活があるのですか？」
「いえ、部活にはありません。僕が個人でやっているものです。ひょっとしたら、弓道とは共通する部分があるのではないかと…」
「そうだったのですか。では、私でよろしければ、説明をいたしましょうか？」
「よろしいんですか？」
「はい。私は、今日はこれでもう終わりですから」
「じゃあ、是非お願いします」
「では、お隣に失礼します」
朋佳が和孝の隣に並んで座った。

和孝は、その座り方にも目を奪われた。流れるように見ていて小気味の良い形（かた）だったからだ。
「弓道には、座り方にも決まった形があるんですか？」
「ほほほ…、これは弓道のものではありません。…茶道です」
「茶道、ですか…」
和孝は、またもや驚かされた。
目の前のこの若い女性は、いったいどこまで日本の古式を体得しているのだろうか。
「どうか、今は細かいことは気になさらないで、リラックスしていてください」
和孝の小さな混乱ぶりを見透かしたように、彼女が柔らかく諭した。
「はい、わかりました」
「では、彼女を見ていてください。私と同学年の五十嵐さんです」
ちょうど、五十嵐美穂が跪座（きざ）の姿勢から立ち上がったところたった。軽く足踏みを始める。
「弓道には、射ち終わるまでに八つの節目があります。今、彼女は足踏みをしながら、射る為の体の土台造りをしています。そして、足踏みで造った両足の土台の上に真っすぐな姿勢を造ります。それを胴造りといいます」
胴造りを終えた美穂が、いよいよ弦を引き始めた。朋佳の説明によると、それは正確には弦だけを引くのではなく、左右に引き分けるのだそうだ。そして、引き分けが完成されると、矢が自然に放たれるのを待つ「会(かい)」の段階に入る。
「会に入ると呼吸を腹の下に移します。丹田呼吸と言います。それから、すべての煩悩を取り去り、心を無の状態にするのです。そして、矢が自然に離れるのを待つのです」
「自然に離れるのを、ですか？」
「ええ、あくまでも自然に…。それを「離れ」といいます」
朋佳がそう答え、じきに矢が放たれた。
残念ながら、美穂の放った矢は的を少し外れてその脇の土の部分に刺さった。どうやら、的に当てるのはそんなに簡単なことではなさそうだった。
その後、美穂と原田が交代で二回ずつ行い、朋佳はそのひとつひとつを丁寧に説明してくれた。その説明はとてもわかりやすかった。勿論、門外漢の彼が千年の歴史に裏付けされた弓道の何たるかを、短い時間で簡単に理解することはできない。だが、それでも同じ競技者として理解できる部分、共感できる部分は随所にあった。時間はあっという間に過ぎて行った。
「平沼さん。もう少しだけ、お話を伺えませんか？」
義和は、思いきって頼んでみた。
「そうですね…」
朋佳は、少し迷っているようだった。
「時間は取らせません。勝手を言ってすみませんが、いくつか伺いたいことがあるんです」
和孝は頼み込んだ。
「お願いします。本当に、少しだけでいいんです」
自分でも驚くほど熱心に誘っていた。
「わかりました。次の予定がありますので、それほど時間がありませんが。それでもよろ

しければ…」
「かまいません。是非、お願いします」
「では、隣の学食でどうでしょうか？」
「ありがとうございます。じゃあ、僕は先に学食へ行って待っています」
少しだけとは言ったものの、訊きたいことは山ほどあった。

三．身分証明

学食は、部室棟の隣の建物の一階にあった。
和孝が待っていると、じきに二人がやってきた。朋佳の方は着替えても清楚な雰囲気を残し、違和感がなかった。だが、私服姿の美穂の方は、弓道のイメージからは程遠い現代的な感じがした。ボーイッシュなショートヘアーのせいかもしれない。だが、彼女も美しくチャーミングであることには変わりがなかった。
「お待たせしました」
「無理を言って、すみません」
「本当よ。せめて、事前に連絡くらいくださいね」
美穂の方が、口を挟んだ。
「それから、始めに言っておきますが、ナンパが目的なら早々にお引き取り下さいね。迷惑ですので」
彼女は明らかに、用心深げであった。
「いや、そんなつもりはこれっぽっちも…。第一、教わる相手は別に女性でも男性でもどちらでよかったんです。たまたま、あの場に居たのが君達だったというだけで…」
「どうだか…。私はともかく、朋佳の方は、あなたなんかが気安く声をかけられる相手じゃありませんからね」
「ちょっと、美穂。そんな言い方は浅尾さんに失礼よ」
朋佳が、美穂を窘める。
「えっ。平沼さんはひょっとして、皇族関係の方かなんか…？」
和孝が、焦って訊ねる。
この大学ならあり得る話であった。そして、彼女なら大いにあり得ると思った。だが、
「とんでもありません。勿論違います」
朋佳も、焦って訂正する。
「朋佳の実家はね、四百年以上も続く茶道の家元なのよ。それもただの家元ではないわ。日本でも屈指の流派なのよ。それに、彼女の弓道の腕前は、全日本クラスなんですからね」
美穂は、自分のことのように得意気に説明した。
「へー、そうなんだ。それでだったのか…」
それを聞いて、和孝は朋佳の優雅な立ち振る舞いの理由が理解できた。
そして、平沼と言う流派の名を何かで聞いたことがあるとも思った。
「それじゃあ、浅尾さん。念の為に、何かあなたの身分を証明するものを見せていただけますか？」

美穂の警戒心は、なかなか解けない。
「何も、そこまでお願いしなくても…」
「駄目よ、朋佳。この前のこともあるし」
二人は、付属の学習院女子高校時代からいつも一緒だった。そろって美人の二人は、事あるごとに異性から声をかけられることが多かった。相手はさまざまなアプローチを試みてアタックしてくる。最近では、日韓ワールドカップのプラチナチケットを餌に言い寄ってくる者もいた。中には、巧妙な作り話で近づいてくる輩もいるのだ。高校時代から美穂は、そのガード役を買って出ていた。
「ははは…、随分と厳しいなぁ。じゃあ…」
苦笑いをしながら、和孝はポケットから学習院大学の学生証を取り出して、二人に見せた。
「一応、本物っぽいね…。でも、カラーコピーってこともあるからね…」
美穂は目を皿のようにして、熱心にそれを確認する。
「ああ、そうだ…。こっちの方が顔写真があるから間違いないかな？」
それを見ていた義和は、ポケットに入っていたもうひとつの身分証明書の存在を思い出した。それを、取り出して美穂に差し出す。それは学生証とは違って薄い手帳型をしたものだった。寸法的にはちょうどパスポートに近かった。表には金文字で「猟銃等銃器所持許可証」と印刷されている。
「どれどれ…」
それをもぎ取るように受け取った美穂が、興味津々に中を見始めた。
開くと、最初のページには本人を示す個人情報と顔写真があり、その下には警視庁公安委員会の大きな朱印が押してある。次のページには登録された三挺の散弾式銃の詳細が書かれている。
「へー、浅尾さん。狩猟をするんですか？」
美穂は、目的を忘れて質問を始めた。どうやら、許可証の中身を見て興味を持ったらしい。
「いや。確かに使うのは狩猟と同じ散弾銃だけど、僕は鳥や獣を撃つ狩猟の方はやらないよ。撃つのはクレーの方だよ。標的射撃って言うものだよ」
「標的…射撃？」
美穂が戸惑う。
「ほら。クレー射撃って、聞いたことないかな？」
「ああっ、知っています。あれですね、クレーって。あの小さな円盤を飛ばすあれですよね。それを銃で撃ち落とすんですよね？」
今度は、質問する美穂の声が弾んだ。
「うん。まあ、そんなもんだね」
和孝は細かい説明を避けた。
「ひょっとして、あれは本物の銃を使うんですか？」
「勿論、本物だよ。だから、そうやってちゃんとした国の免許が必要になるんだ」
「へー、そうなんだ。凄いわ、本物なんだ。…そうすると、こういう免許を取るのは大変なんでしょうね？」

彼女の関心は完全に銃の方に移っているようであった。
「確かに簡単ではないだろうけど。でも、それなりの段階をきちんと踏んでいけば、大半の人は取れるはずだよ」
「本当に？」
「うん。ただし、精神的な障害のある人と重い犯罪歴がある人は駄目だけどね。その点は、美穂さんは大丈夫かな？」
和孝が笑いながら、からかって言うと、
「あはは…。もう、浅尾さんたら、酷―い。そんなのあるわけないじゃないですかぁ！」
そう言って美穂が笑った。
「ほほほ…。美穂があまりにもしつこくするから、そうやって、からかわれるのよ」
つられて朋佳も笑った。
三人が笑い合って、それで一気に打ち解けることができた。
和孝は、今度はクレー射撃がどんなスポーツなのかを丁寧に彼女達に説明し始めた。そして、その競技者である自分がその不動の形を必死で模索している最中であり、その流れで弓道の所作に着目したことを真剣に説明した。
「そうだったんですか。よくわかりました」
「なるほどね。そういうことだったんだ」
二人はおのおのに理解を示してくれた。
「さっきの私の説明を聞いてみて、何か参考になりそうなことがありましたか？」
朋佳が訊いた。
「うん。何から何まで、すべてに感じる所がありました」
「そうですか。少しでもお役にたててよかったです…。ですけど、ごめんなさい。今日はもう帰らなければなりません」
腕時計を見た朋佳が、申し訳なさそうに言った。
「いや、こちらこそ無理に引き留めちゃって」
「本当にごめんなさい。何かあれば、また弓道場の方へいらしてください。浅尾さんなら大歓迎です。ね、美穂？」
「うん。いつでも来ていいですからね。私達で力になれることがあれば、何でも言ってくださいね、浅尾先輩」
当初は敵対していたはずの美穂も、温かくそう言ってくれた。
「ありがとう、美穂さん」
「じゃあ、今日はこれで失礼します」
二人はきちんと会釈すると、その場から去って行った。
それを見送る和孝は、朋佳の携帯の番号を聞かなかったことをひどく後悔した。
大学の西門を出て、目白駅に向かう朋佳達の会話は当然のように和孝のことばかりであった。
「浅尾先輩って、感じのいい人だったよね？」
美穂は、完全に和孝のファンになっていた。
「そうね、本当に…。でも、中途半端になってしまって…。かえって申し訳ないことをしてしまったわ」

「そうだね。もっと、弓道のことを教えてあげたかったよね」
「ええ…。携帯の番号を教えてあげればよかったわ」
「うん。あの人になら、そうしてあげても良かったと思うよ。凄くきちんとしてそうだし。でも、きっとまた練習を見にくるよ」
「そうね。そうよね…」
朋佳は、心からそうなればいいと思った。
だが、和孝が弓道場に顔を見せたのは結局、この日が最初で最後だった。

四．分岐点

一か月後―。
平沼朋佳のワーゲン・ゴルフは、常磐道の上りを走っていた。
父の使いで、益子町の窯元に焼きものを取りに行った帰り道だった。
今、彼女はある決断に迫られていた。このまま真っすぐ東京へ向かうのか。それとも、次の友部ジャンクションで進路を変えるのかを。
分岐点は近づいていた。
父の平沼玄雲は、代々続く茶道の流派の総本家の家元だった。
厳格という言葉を、そのまま当てはめたような人であった。二万人の弟子を持つ父は、娘の朋佳にも相応の立居振る舞い立ち振る舞いを求めた。彼女は、子供の頃から事あるごとに父の考えに従わされてきた。宗家の娘として恥ずかしくないようにとの理由からだ。母の澄江が病死してからは、更にそれが顕著になった。人生の大事な節目には、常に彼の意向が反映されてきた。進学する学校についてもそうだった。そこで行う部活動についてすらそうだった。だが、彼女は逆らうことはしなかった。結果的には、常に思慮深い父の考えが正しいのだということを信じていたからだ。そう自分に言い聞かせて従ってきた。
車内に流れているのは、ウイーンフィルのＣＤだ。父は、彼女が聞く音楽もクラシックしか許していなかった。
「よし、行こう！」
そう呟くと、朋佳はクラシックのＣＤを取り出して代わりのＣＤを入れた。
パンチのあるアップテンポの女性ヴォーカルの曲だった。大好きなＢＯＡの新曲・ＶＡＬＥＮＴＩだ。自然とアクセルに力がこもる。そして、彼女はハンドルを切って進路を変えた。車は友部ジャンクションで分岐し、そのまま西へ向かった。
友部の料金所を出て、住宅街を抜け、やがて林道に入って行く。このあたりは、茨城県西茨城郡友部町の山間部になる。登り坂をしばらく走ると目的地が現れた。ＭＪ友部射撃場と書かれたゲートをくぐり、白亜の堂々としたコンクリート造りのクラブハウスの脇の広い駐車場に車を停める。
彼女は、車の中で自分の気持ちを整理した。
この数日間、浅尾和孝から聞かされたクレー射撃という競技のことが頭から離れなかった。あの時和孝は、弓道の所作、精神の中から射撃に通じる何かを必死に学ぼうとしていた。彼の話を聞いてみると、理にかなっていると感じた。逆もまた真なりで朋佳の方もク

レー射撃から弓道に活かせる何かがありそうだと感じていた。だが、その時はゆっくりと意見を交わすまでの時間がなかった。そして、結局その後も彼が弓道場を訪れることはなかった。遠慮してしまったのかもしれない。彼女はそのことをひどく後悔していた。学生課へ行って彼の連絡先を調べる手だてもあった。だが、そこまでの勇気は持てなかった。

仕方がないので、インターネットを使って、クレー射撃のことを調べてみた。まずは、実際にどんなものなのかを見てみたいと思った。残念ながら、東京都内にはクレー射撃場はなかった。しかし、周辺の県にはそれぞれ何か所かあった。彼女はその中から一カ所を選んだ。それがこの射撃場であった。他に何カ所か、もっと東京に近い射撃場があったのだが、彼女はあえてここを選んだ。ここは他と違って、実際に射撃用の銃を製造する会社が経営する射撃場だったからだ。そして、父の使いでよく行く益子や笠間の通り道にあることも理由の一つだった。偶然のタイミングで父に今日の使いを頼まれた時、彼女は何か運命のようなものを感じていた。

「よし！」

彼女は、腹を決めてクラブハウスの中へ入った。

受付に行くと、品のいい女性が応対してくれた。朋佳が訪問の目的を話すと、その女性がどこかに電話を掛け、そのままエントランスで待つように言われた。十分ほどして五十歳前後の一人の男性がやって来た。

「お待たせしました。見学を希望されているのですね？」

「はい、できましたら」

「では、私がご案内しましょう。三上と申します」

物腰の柔らかい、安心感が持てる印象の男だった。

「平沼と申します。宜しくお願いします」

二人は、射撃場に向かった。

「平沼さんはまだお若いようですが、クレー射撃に興味を持たれたんですか？」

「はい。私は大学で弓道をやっているのですが、クレー射撃がその参考になると思いまして」

「ほう。それはまた、おもしろい着眼点ですね」

「ええ。正確に申しますと、私の考えというよりは、あるクレー射撃をやっている方が、そのことを最近おっしゃったのです」

「そうだったんですか。…失礼ですが、平沼さんは大学の何年生ですか？」

「三年です」

「そうですか。そうすると、私の息子とほとんど同じですね」

「そうなのですか。息子さんは、やはりクレーをなさるのですか？」

「いやぁ、それが残念ながらクレーにはあまり関心がないようで…。今はサーフィンなんかに夢中になっています。できれば、後を継いで欲しいと思っているんですが、あいつは、サーフィンのプロを目指すと言っているんですよ。困ったものです…」

話の内容から、三上はこのＭＪ社のオーナーのようであった。

「そうですか、それは残念ですね。でも、私から見れば、親の敷いた道に縛られずに、ご自分のやりたいことができるというのも羨ましいことだと思います」

「ははは…、そうかもしれませんね」

「あっ、ごめんなさい。私、生意気なことを申しまして」
思わず言ってしまった自分の言葉の内容に気づき、朋佳は、あわてて謝った。
「ははは…、いいんですよ。確かに、平沼さんのおっしゃる通りかもしれません」
幸い三上は、彼女の進言を素直に受け止めてくれていた。
射撃場は、クラブハウスから道を隔てた反対側にあった。何人かが、射撃をしているようだった。近づいていくとパーン、パーンという複数の銃の発射音が聞こえてくる。
思っていた以上の大きな音だった。だが、不思議と不快には感じられなかった。
「まあ、素敵ですね！」
朋佳が、思わず感嘆の声をあげた。
インターネットでの写真では見られなかった射撃場の全景は、想像以上に広くて美しかったからだ。ＭＪ社の射撃場は中央を境に左右に分かれていた。大きさはそこまではないが、ちょうどゴルフの練習場によく似ていると思った。それぞれに五つの打席のような区割りが横に並び、上はグリーン色のビニールシートの屋根でつながっている。周囲は綺麗に刈り込まれた芝生と低い植栽に囲まれている。朋佳は、いっぺんにその雰囲気が気に入った。ゴルフ練習場と少し違うのは、射撃場の左右の隅にはそれぞれに電光得点板が備えてあることだった。
大きく切り開かれた正面の小山は、六～七十メートル先のあたりで斜めに削られて、目の前にネットで保護された巨大な山肌の土の壁が広がっていた。その中央から下の部分には鮮やかなオレンジ色の何かが隙間なく散乱していた。
「あのオレンジ色のものは何ですか？」
朋佳が訊ねた。
「ああ。あれがクレーの残骸なんですよ」
「あれがそうなのですか？　クレーというのは、てっきり白いものなのかと…」
朋佳が外国映画などで見て抱いていたクレーのイメージは、白色であった。
「ええ。おっしゃる通り、以前は白かったんですよ。でも、最近はオレンジが主流なんですよ。今では、ほとんどの射撃場がオレンジ色のクレーを採用しています」
「そうなのですか。何か理由があるのですか？」
「ええ。その方が識別し易いからです。白色だと曇りの日などは見づらいですからね。なにしろ、狙う相手は秒速３０ｍ以上のスピードで飛んで行きますから」
三上は、丁寧に説明してくれた。
近づいていて行くと、確かに打席の十五メートルくらい先の地面の中からオレンジ色の小さな円盤が発射されたのが見て取れた。オレンジ色の円形のそれは、亡くなった母の澄江が大好きだったガーベラの花を連想させた。発射機そのものは見えない。おそらく、それは地面の中にセットされているのだろう。発射されたクレーは二秒と経たないうちにプレーヤーに射抜かれ、遥か向こうの空中で粉砕し、散らばって落ちていった。
「まあ！」
それを見た朋佳は、思わず叫んだ。
そして、経験したことのない胸の高ぶりを感じ始めていた。
向かって左側の射撃エリアでは年配の男達が三人でプレーをしていた。
「平沼さん。私達はあちらの方へ行きましょう」

三上は、それとは反対の右側のエリアの方を指差した。
「左側でプレーされている年配の方々は自己流で楽しんでいますから、あまり参考にされない方がよいでしょう。綺麗なフォームを見るのなら、右側の上級者用の方でされている方の射撃を見学されるとよいですよ」
右側では、一人だけが射撃をしていた。
驚いたことにそれは女性だった。二十歳代くらいで、背が高く、外国人のようにも見える。
「彼女の射撃を御覧になるといいですよ」
朋佳と三上は、射撃台の後ろにあるベンチに座って、その女性の射撃の様子を見始めた。
「運が良かったですね。彼女は、ちょうど昨日、オーストラリアから帰ってきたところです。あなたと同じ女性ですし、まさに非の打ちどころのない美しいフォームですよ」
彼女は、次の射撃に入るところだった。
「同じだわ…！」
それを見た朋佳は、内心驚いた。
その女性が射撃台で行っているのは、まさに弓道の足踏みの動作と同じ動きだったからだ。両足の土台造りが終わると、胴造りの姿勢に入っていく。弓道よりは少し動作が早く、多少前傾みではあるが、基本的な考え方は同じだと感じた。
朋佳は、息を呑んでその様子を凝視した。
体の造りが完了すると、その女性は腰のポケットから取り出した二個の散弾を銃に込め、真っすぐに閉じる。そのまま銃を水平に顔の頬骨の位置まで引き上げる。弓道で言うところの引き分けが完成された。そして、会(かい)の段階に入る。やはりそれは、弓道の所作と酷似していた。
やがて、彼女の掛け声と共にクレーが空に向かって発射された。どうやら、それぞれの射撃台の脇に立っている高さ五、六十センチの集音器のような装置が、彼女の掛け声を感知してクレーが発射される仕組みのようだった。
そして、彼女の銃から撃ち出された散弾は、オレンジ色のクレーを綺麗に粉砕した。それは、始めに見た射撃場の左側の年配者達のよりも大きく綺麗に広がった。おそらく、クレーの中心部に命中させたからだろう。まるで、打ち上げ花火を見ているようだった。
「まあ、綺麗！」
おもわず、朋佳は叫んだ。
そして、小さく身震いをした。
おそらくそれは、自分の生涯で忘れられない光景のひとつになるのだろうと、彼女は直観していた。

五．訴え

一時間後―。
ＭＪ社のクラブハウスの建物は、半分がレストランになっていた。天井まで十メートル近くあり、開放的で洒落ていた。ＭＪ社のオーナーである三上恵造は、朋佳にコーヒーを

ふるまった。
「すみません、お忙しいのに社長さんにここまでしていただいて」
「いやいや、ついでがありましたので気になさらないでください。実は、さっき射撃場でご覧になった彼女とちょっとした打ち合わせがあって、丁度こちらに向かおうとしていたところだったのです」
ＭＪ社の社屋兼工場はこのすぐ近くにあるとのことだった。
「あの背の高い女性は、クレー射撃の選手なのですか？」
「いや、選手ではありませんよ。ただし、彼女の父親は選手ですけどね」
「お父様が…？」
「ええ。しかも、桁外れに物凄い選手です」
「物凄い、といいますと？」
「そうですね…。例えるなら、百年に一度出るか出ないかの偉大なプレーヤーです」
「それは、本当に物凄い方なのですね。外国の方なのですか？」
「いいえ、日本人ですよ。奥さんはイタリアの方でしたが…」
「ああ、それで…」
朋佳は納得した。
さっきの射撃の女性が外国人に見えたのはそのせいだったのだ。
「ははは…。話をすれば、ちょうどやってきましたよ」
三上の視線をたどると、練習を終えたその女性がクラブハウスの入口から、こちらの方へやってきた。朋佳は彼女に目を奪われた。決して、派手な出で立ちではないのだが、まるでランウェーを颯爽と歩くファッションモデルのように見えたからだ。唯一違うのは、ショルダーバックを細長くしたようなケースを肩にかけて持っていることだった。品のいい革製のそれには、Ａ・Ｋという文字が刺繍してあった。おそらく、彼女のイニシャルなのであろう。
「おじさま、お待たせしました」
「お疲れ様」
三上はすぐに、朋佳を紹介した。
「亜里沙ちゃん。こちらは、平沼さんです」
「始めまして。平沼朋佳と申します」
「こんにちは。近衛亜里沙です」
挨拶を終え、亜里沙が革製のケースを肩から外して足元に置くと、朋佳の好奇の視線が自然とそれに注がれた。
「あの、それはもしかして…？」
「ああ、これ。銃のケースなんですよ。珍しい形でしょ？」
「その中にさっきの銃が…？」
「ええ。なかなか素敵でしょ。知り合いのイタリアの革職人さんに特別に作っていただいたのよ」
「でも、銃はもっと長いはずでは？」
「ほほほ…。勿論、分解してあるわ」
「さっきのあの銃は、分解ができるのですか…？」

「えっ？」その朋佳の問いかけに、亜里沙は戸惑った。
散弾銃を持ち運ぶ時は大きく二つに分解するのが常だからだ。通常、射撃の時のように完成した長い形で持ち運ぶことなどは珍しいことなのだ。
「平沼さん。ひょっとして、銃のことは？」
「はい。まったくわかりません」
「そうだったのですか。ごめんなさい。私、てっきり…」
「ははは…。平沼さんは弓道をやっておられて、クレー射撃をその参考にしたいということでここへいらしたんだよ」
「まあ、そうだったんですか。この銃ケースに興味を持たれたので、てっきり…」
三上の説明を受けて、亜里沙が釈明した。
「私の方こそ、まぎらわしいことを聞いてしまって、ごめんなさい」
「いいえ。早とちりしたのは私の方ですから…。平沼さんは、弓道をなさるのですか？」
「はい。嗜む程度ですが」
「とんでもない。国体に選ばれる程の腕前だそうだよ」
三上が朋佳の謙遜を訂正した。
「まあ、国体の…。それは凄いわ。それで、いかがでしたか。何か参考になりましたか？」
「はい、とても。それどころか、想像以上に…」
言葉通り、朋佳が受けた衝撃は自分の想像を遥かに超えていた。
それは、参考と言う範疇を突き破る程のものであった。
「それは、良かったわ。何か聞きたいことがあったら遠慮なく言ってみてください。私はともかく、この三上さんはクレー射撃協会の理事をなさっていますから、何でもご存知ですよ」
「ははは…。撃つ方はそれほどでもありませんが、それ以外のことであれば何なりと」
勿論、三上は半分社交辞令のつもりで言ったのだが、結果的にその言葉は朋佳の気持ちの引き金を引くことになってしまった。
「何を伺ってもよろしいのですか？」
「ええ、いいですよ」
「それでは、お言葉に甘えて、是非教えていただきたいことがあります」
朋佳は、急速に芽生えていたその気持ちを抑えきれなかった。
「私でも…」
ついに彼女は、それを訊いた。
「私でも、クレー射撃ができるでしょうか？」
「えっ、あなたが？ だって、今日は弓道の参考にする為にクレー射撃を見に来られたのでは…？」
三上は慌てて確認した。
それを訊く彼女の表情が、尋常でなかったからだ。今までの柔らかな眼差しとはうって変わって、何か思いつめたような真剣な表情になっていたのだ。
「はい。確かに、ここへ来るまではそう思っていました…。でも、さっき亜里沙さんが実際に銃を撃つ場面を拝見していて、私もやってみたいという気持ちがどうしようもなく湧き出てきてしまって…」

朋佳は、抑えきれずに吐き出した。
「私。もう、自分を欺いて生きるのは嫌なんです。こんな気持ちは生れて初めてなのです。弓道も、茶道も、英会話も、自分からやりたいと思ってやっているものではないのです。父から言われて何となく続けて来たのです。でも、クレー射撃は初めて自分からやってみたいと…。ごめんなさい、私…」
言い切った彼女は、恥ずかしさのあまりうつむいてしまった。
他人に、まして初めて会う相手にここまで自分の気持ちをさらけ出したことがなかったからだ。
その時、亜里沙が朋佳の元に歩み寄り、小さく震える彼女の手を包み込むように握って笑顔で言った。
「いいわよ。私が手伝ってあげるわ」

六．秘密練習

福島県東白川郡―。
県道から一キロ半ほど入った山の中腹にその射撃場はあった。
浅尾和孝は、友人の三上謙作と共に射撃台に並んでプレーしていた。
和孝は、今週末に控える日本選手権へ向けて最後の調整に入っていた。この二年間、大きな大会に臨む直前の時には、必ず謙作に練習のパートナーになってもらっていた。
同い年の二人は、父親同士が若い頃からの親友だということもあって、子供の頃から仲が良かった。だが、和孝が謙作を練習のパートナーに選んでいるのは、ただ単に仲が良いという理由だけではなかった。謙作の射撃の力量が人並外れて優れていたからだった。彼の存在のおかげで、和孝は常に最高レベルの競い合いの中での練習をすることができていた。ある意味、それは競技会の決勝戦と同じ、もしくはそれ以上のレベルと言っても、決して言い過ぎではなかった。
だが、それ程の力量を持ちながら謙作の方はクレー射撃の選手ではなかった。
彼は、サーファーの道を選んでいたのだ。サーフィンの方でも、彼は非凡な才覚を持っていた。まだ学生の身でありながら、すでにプロのトーナメントにも出場し、着々と頭角を現してきていた。謙作はクレー射撃に並外れた才能があることも、時々それをやっていることも父の恵造には秘密にしていた。会社を継いで欲しいと日々願っている恵造に、無用な期待感を持たせない為だった。
ラウンドを終えた二人は、クラブハウスの脇のベンチに腰掛けて休憩に入った。
二人はこの射撃場を好んで練習に使っていた。理由の一つは、練習パートナーの三上謙作が通い易いという立地条件だ。福島県とは言ってもこの射撃場は一番県の南部に位置しており、茨城県とは県境であった。北茨城市内にある謙作の今の住居からは、さほど遠くない場所にあるのだ。彼はサーフィンの練習の為に、父の親友の実家を仮宿にさせてもらっていた。その界隈は県内でも安定したいい波があるスポットだからだ。
もうひとつの理由は、この射撃場の持つ爽快感だ。日本の射撃場の多くは山の中に造られ、削った山の斜面＝バックストップに向かって撃つという構造になっている。つまり、

目の前には常に巨大な山の壁が存在するのだ。謙作の実家のＭＪ社の射撃場も同じ造りである。だが、ここは違った。正面にはバックストップがなく、自然の谷に向けてそのまま撃ち放つことができる。プレーヤーは、この上ない開放感と爽快感を味わうことができるのだ。しかも、あまり知られていないこの射撃場は他に比べて利用者が少なく、秘密練習にはもってこいだというのも利点の一つであった。

それぞれに飲み物を手にしながら、二人はその爽快感に浸っていた。目の前には、見渡す限りの山々が広がっている。

「やっぱり、ここはいいなぁ。こういうのを大パノラマって言うんだよな」

コーラを飲みながら、晴れ晴れとした気分で謙作が言った。

「謙作は生活の基本が海だが、山の景色もいいもんだろう？」

「うん、最高だ。この景色が見られるから、下手くそなおまえの練習に我慢して付き合っているようなもんだ。ははは…」

「ははは…。こいつ、言ったな」

そう言われた和孝は、チェリオを飲みながら苦笑いをするしかなかった。

今や、日本選手権の最有力候補とまで言われている自分に対して、「下手くそ」という悪態をつける実力を、実際に彼は持っているからだ。

「だけど、俺にも秘密のお勧めポイントがあるんだ」

そんな和孝の気持ちを気にもせず、謙作が勿体ぶったように言った。

「へー、それはどこだい？」

「千葉にある富津国際射撃場ってところだ」

「千葉の富津…。そこには行ったことがないな」

「うん。あまり知られてはいないけど、東京湾横断道路ってのが完成すれば、もっと利用者が増えるかもしれないな。何と言っても、都内には射撃場が一カ所もないからな」

「ふーん。そこはやっぱり、ここみたいにバックストップがなくて開放的なのか？」

「いや、バックストップはあるよ。だけど、爽快感があるんだ」

「言っている意味が、よくわからないな？」

「実は、すぐ隣が海なんだよ。だから、最高にイケてるんだ」

「なるほど、そういうことか。今度、機会があったら撃ちに行ってみよう」

「俺は、恋人ができたら必ずそこへ連れて行ってあげたいと思っているんだ。もっとも、まだそんなは相手はいないけどな…」

「本当にいないのか？」

和孝は驚いたように訊いた。

背も高く、西洋人のように目鼻立ちがはっきりしている謙作が、普通ならもてないわけがなかった。

「それが、本当にいないんだ。今の所、サーフィンだけが俺の恋人さ」

茶色に潮焼けした長い髪をかき分けながら、残念そうに答える彼の話は、どうやら本当のようであった。

「ふーん。もし、それが本当だとすると、僕の方が先に行けるかもしれないな」

「えっ、和孝。おまえ、彼女ができたのか？」

「ははは…、冗談だよ」

「だろうな。おまえはルックスは悪くないが、そっちの方は昔からまったくの奥手だからなぁ。真面目の上に生(き)の字がつくくらいだ」
「ああ、おまえにはかなわないよ。女性へのスマートな接し方も、ついでに言えば、銃の方もな」
　和孝は半ば冗談、半ばふてくされ気味に返した。
　女性のことはともかく、銃の方のそれは本心でもあった。和孝はいつも謙作の恵まれた資質を羨ましく思っていた。三上謙作には、生まれついての資質が備わっていた。いわゆる天賦の才である。平凡な人間がそれに打ち勝つには、練習と研究を重ねて行くしかなかった。そして、いつしか真に彼に勝利することが和孝の目標になっていた。それは、日本選手権のタイトルを取ることよりも困難に思えた。だが、今の和孝にとってそれが射撃の道に精進することへの原動力になっていた。彼を越える為なら、どんなことでも試してみようと思った。他の競技、例えばアーチェリーや弓道の基本から、銃競技に活用できるものがないかを学ぼうともしたこともあった。
　和孝は、同じクレー射撃の競技者であった父の話を思い出していた。かつて父にも、越えられない存在がいた。相手はやはり、天賦の才に恵まれたプレーヤーだった。しかも、それは、今の自分と同じように父の古くからの友人であった。だが、その人物がいたおかげで父はあらゆる研鑽を重ね、やがては日本の頂点に立つことができた。その人物こそ、近衛慎一郎、通称・男爵である。
「ははは…。どうした、和孝。真剣な顔をして考え込んで…。俺に言われたことが気にさわったのか？」
　そんな和孝の心境を知る由もなく、謙作は憎らしいほどさっぱりとしていた。
「違うよ。そういえば…。この間、素敵な女性と知り合ったよ」
　和孝は、ふと平沼朋佳のことを思い出して呟くように言った。
「えっ。今度は、本当の話か？」
「うん。とはいっても、一度会ったきりだけどね。しかも、話ができたのは全部で二時間くらいだった…。でも、それで充分なくらいに彼女の魅力が感じられたんだ」
「おいおい。それは、いったいどういう女性なんだ？」
　謙作が、身を乗り出して訊いてきた。
「実はこの間、射撃の参考にしようかと思って、大学の弓道部を訪ねたんだけど…」
「学習院大のか？」
「うん、そうだ…」
　和孝が、その時のいきさつを話し始めた。
　そして、話していくうちにどんどん熱くなっていった。二人は射撃の練習のことも忘れて、その女性の話に夢中になった。
「そうか、日本の様式美か…。今のこの世の中に、そんな女性がいるのか…。会ってみたいなぁ」
　話を聞き終わった謙作が、羨ましそうに言った。
　その時、和孝の携帯が鳴った。
「もしもし…。ああ、亜里沙さん…」
　和孝の電話の相手が亜里沙だとわかると、謙作が慌てて口元に人差し指を当て、自分が

ここにいることは言わないように仕草した。彼女と話をしながら、和孝が指でＯＫ印を作って応えた。謙作が、クレー射撃をすることを秘密にしなければならないのは亜里沙に対しても同じだった。父の恵造と亜里沙は親子のように仲が良く、何でも筒抜けだからである。そのことは、和孝も心得ていた。

「亜里沙さん、何だって？」

携帯の話が終わった和孝に、謙作が訊いた。

「うん。週末の日本選手権が終ったら、できるだけ早くＭＪの射撃場の方に来てくれだって。ちょっとした、頼みごとがあるって言っていた」

「ふーん、何だろうな？」

「僕にも、見当がつかないよ」

「ひょっとしたら、亜里沙さん。おまえの優勝記念のサプライズ・パーティーでもやろうとしているのかもな。きっと、そうだ。そうに違いないぞ」

「ははは…、まさか。まだ、優勝すると決まったわけでもないのに…。しかも、ただの試合じゃないんだぞ。日本選手権だぞ」

和孝が笑って言った。

だが、謙作は真顔で返した。

「いや。間違いなく、おまえが優勝するよ」

七．新しい指導者

「まあ、あきれたわ！」

近衛亜里沙は、ＭＪ社の射撃場のプーラー室の中で、この日三度目の驚きの声を上げた。

射撃台の平沼朋佳は、亜里沙が新しく設定したクレーの速度にものの見事に対応できていた。たったの二カ月弱ほどで、朋佳は初心者のレベルどころか、上級の競技者のレベルに到達していたのだ。

クレー射撃場には、必ず射撃台の後方にプーラー室が存在する。そこは言ってみれば、射撃のコントロール・ルームである。そこでは、打ち出されるすべてのクレーの方向や角度、速度などを自在に制御できるようになっている。それを「設定」と呼ぶ。

亜里沙は、朋佳の射撃の成長に合わせてその設定のレベルを少しずつ上げて行った。朋佳は日を追うごとに腕を上げて行った。そして、ついに来る所まで来てしまっていた。今日の設定は、もうこれ以上は上げられない最高難易度に到達していたのだ。それは、世界選手権やオリンピックの試合で使われるレベルの設定であった。

亜里沙は感じていた。弓道の上級者である朋佳は、他のプレーヤーとはどこかが違っていた。細かい技術的なことまではわからないが、それがクレー射撃に有益に活かされていることだけは確かだった。ただひとつ、亜里沙にもわかるのは、朋佳の人並外れた集中力であった。それが弓道によって培われたものであるということは間違いなかった。

「朋佳さん、ティー・ブレイクにしましょう」

亜里沙は、彼女に休憩を取らせた。

亜里沙の方から言いださないと、朋佳から中断することはなかった。今の朋佳は文字通

りクレー射撃の虜になっていた。誰かが止めないといつまでもやめることはなかった。
亜里沙は、持ってきた携帯魔法瓶からハーブティーを注いで朋佳に渡してやった。
「いただきます。…まあ、美味しい！」
「ほほほ…、茶道の家元の娘さんに褒められるとは、光栄だわ」
「私の方も、クレー射撃の世界チャンピオンの娘さんに手ほどきをいただいて、光栄ですわ」
亜里沙の父親・近衛慎一郎は、クレー射撃の世界では知らぬ者はいない。世界の誰もが認める唯一絶対の王者であった。十三年間無敗の彼は、すでに世界選手権で前人未到の六連覇を成し遂げ、今なお偉大な王者として君臨し続けているのだ。世界中のクレー射撃愛好者やその関係者は、最大の敬意を込めて、いつしか彼を「男爵」と呼んでいた。
「ほほほ…。そういえば私達は、お互いに「重すぎる」父親を背負っているという点では一緒だったわね」
「ええ、本当に。ほほほ…」
二人は、仲の良い姉妹のように笑い合った。
実際、今の二人の関係はそう表現するのが一番似合っていた。特に、朋佳は心底嬉しそうだった。彼女は、生れて初めて本当の意味での「自由」を満喫していたからだ。父親の束縛から離れ、自分の意志で自分の一番したいことに熱中できているからだ。そういう意味では、今の亜里沙も同じような解放感に満たされていた。晴れ晴れとした気持ちになっているのは亜里沙も同じだった。朋佳は、彼女のその変化に気付いていた。
「亜里沙さん、最近何かいいことがありましたか？」
朋佳が、それを訊いた。
「えっ、どうして？」
「何か、生き生きとして。以前にも増して、綺麗に輝いて見えます」
「まあ、そうかしら。嬉しいけど、何でかしらね…」
それを言い当てられた亜里沙は、とぼけながらも少し慌てた。
心当たりは一つしかなかった。そして、それに間違いなかった。二週続いているＭＪ社の青年重役・玉木恭平とのヨットのデートだ。先々週は、河口湖。先週は浜名湖だった。男爵の秘書として、休みなく世界中を同行する亜里沙の心労を慮った恭平は、小さなヨットを沖に出して、そこにくつろぎの空間を作ってくれた。それは、どんなリラクゼーションからも得られない程の安らぎを彼女に与えてくれた。そんな恭平の存在は、亜里沙にとってかけがえのないものになりつつあった。
「絶対に。絶対に、いいことがありましたよね？」
朋佳が、興味津々の笑顔で詰め寄ってくる。
「さあ、どうでしょう。ふふふ…」
そうはぐらかす亜里沙の態度には、隠しようのない嬉しさがにじみ出ていた。
「きっと、素敵な恋をなさっているのでしょうね。聞かせていただけませんか？」
亜里沙のその態度に、確信に近いものを感じた朋佳がそれを聞きたがる。
「まあ、朋佳さんったら…。その話は、また今度ね。今は、あなたはクレー射撃に集中しなさい」
「はーい。言われなくても、私の恋しい、恋しい人は、このお方だけです」

そう言って、朋佳が傍らの銃を愛おしそうに撫でた。
「でもね、朋佳さん。今すぐというわけではないけど、いずれは私も、お役御免だわ」
「そんな…。そんなことをおっしゃらずに、これからも引き続きお願いします」
朋佳が慌てて哀願した。
「そうしたいのは山々なんだけど、いずれイタリアにいる父から連絡が入って、父の手伝いを再開しなければならなくなるわ」
男爵こと近衛慎一郎はイタリアに拠点を置き、そこから世界中の競技会やイベント活動をこなしている。語学が堪能な亜里沙は、そんな父親の通訳兼個人秘書としてそれに同行しなければならないのだ。今でこそ、彼は休養期間に入ってはいるものの、それがいつ再開するかはわからないのだ。
「それに、あなたの力量は、すでに私の教えてあげられるレベルを超えようとしている。これからのあなたには、もっとレベルの高い指導者が必要だわ。それは、あなた自身の為でもあるのよ」
「そうなんですか…」
朋佳は肩を落とした。
短期間で自分がここまで来れたのは、ひとえに亜里沙の温かい支援と指導のおかげだったからだ。さまざまな手続きが必要な銃の所持の免許取得の時についてもそうだった。彼女と三上恵造の手配と後押しのおかげで、最短の労力で済ませることができたのだ。
「ほほほ…、そんなにがっかりしないで。なにも、今日、明日の話ではないのだから。それに、ちゃんと手は打っておいたわ。私がいなくなってもいいように、新しいアドバイザーを紹介してあげる」
「新しいアドバイザー？」
「ええ。現役の選手だから、私のようにしょっちゅう付き添って教えてもらうのは難しいと思うけど、実力は折り紙つきよ。クレー射撃を教わるのには、今日本で一番説得力のある人よ。何といっても、この間、日本選手権に優勝した人だから」
「ええっ。つまり、日本チャンピオンですか？」
「ええ、そうよ。まだ、なったばかりだけどね。でも、安心して。誠実でとてもいい人だから。人柄は、私が保証するわ。むしろ、真面目すぎるくらいよ。それに、あなたに年も近いし…」
「ええっ。そんなに若いのにチャンピオンなのですか？」
朋佳が、驚いてそう訊いた時だった。
「ほほほ…。噂をすれば、やって来たわ」
入口の方を見て、亜里沙が言った。
こちらに向かって歩いてくるその若い男性を見て、朋佳は目を疑った。
「あ、浅尾さん！」
「えっ、まさか…。平沼さん？」
三カ月ぶりの再会であった。
「まあ。あなた達、顔見知りなの？」
亜里沙が驚いて訊いた。
「は、はい…。亜里沙さんが射撃を見てもらいたいって言った人は、ひょっとして、平沼

さんのことですか？」
和孝も驚きながら尋ねた。
だが、その視線は朋佳から離れられない。無理もなかった。三ヶ月間、想い描いていた相手が、いきなり目前に現れたのだ。
「ええ、そうよ…。そうか、そういえば、和孝君も学習院大だったわね。それじゃあ、二人は大学で？」
「そうなんです。射撃の参考にしようと思って、僕が彼女のいる弓道場に押しかけて行って、その時にいろいろと説明役をしてくれたのが…」
和孝は、その時のことを思い出して、頭をかきながら亜里沙に説明した。
「そうだったの。でも、その理由がいかにも一生懸命な和孝君らしいわね。ほほほ…」
亜里沙が納得して笑った。
「あの…、お二人はどういうご関係なのですか？」
とても親しげな二人の様子を見て、今度は朋佳が訊ねた。
「ああ、そうだったわね…。私の父の慎一郎と和孝君のお父様の浅尾義和さんは、若い頃からの親友同士なの。今でもとても親しいのよ。その友達の輪の中にはここのＭＪの三上さんと、水戸にいらっしゃる工藤さんという方も入るの」
「水戸の工藤さんというのは、よく亜里沙さんのお話に出てくる十代の頃にお世話になった方のことですね？」
「ええ、私の日本の父親代わりよ。その四人は、高校生の時からのそれこそ大親友で、とにかく兄弟のように仲がいいのよ。だから、その子供の私達も小さな頃から姉弟のように付き合ってきたの」
「そうだったんですか」
「あら、いけない。もうこんな時間だわ」
亜里沙が時計を見て言った。
「私はこれから、三上さんと父の仕事ことで打ち合わせをしなければならないの。…そうそう、言うのを忘れていたわ。そういえば、朋佳さんは来週の土曜日は時間が取れるかしら？」
「はい、大丈夫だと思いますが。土曜日は大学の授業もありませんし…」
「それはよかったわ。実はその日、三上さんのお宅で内輪で和孝君の優勝のお祝いをするのだけど、あなたも是非参加して下さいね」
「あ…、はい。でも、内輪の会に私なんかがお邪魔してもよろしいのですか？」
「勿論よ。あなたは、私の妹分なんですからね。それに、和孝君とも知り合いなんだから、立派なファミリーの一員ですよ。もし、心細かったら、お友達も誘ったらいいわ。ね、必ずいらっしゃい」
そう亜里沙が言うと、
「平沼さん。是非、参加してください！」
和孝も頼んだ。
場違いに強い口調だった。
「わ、わかりました。それでしたら喜んで」
その様子を見ていた亜里沙が、微笑んで言った。

「ほほほ…。会の主役からそこまで強く言われたら、もう断れないわよね。よかったわ。じゃあ、和孝君。彼女のこと、あとは頼んだわね」
「は、はい」
「それでは、朋佳さん。お先にね」
「はい。今日は、ありがとうございました」
亜里沙が駐車場の方に急いだ。
やがて、二人の視界から彼女が消えると、それぞれの視線は、そのまま自然に相手の顔に注がれていった。しばらく二人は、言葉を忘れてまじまじとお互いの顔を見合った。二人だけになって、改めて、再び会えた驚きと感動が沸きあがってきた。やがて、朋佳が笑みを浮かべると、和孝もそれに応えた。
「日本チャンピオンになられたのですね、おめでとうございます」
彼女の方が、先に口を開いた。
「ははは…、ありがとう。…でも、驚いた。まさか、亜里沙さんが言っていた相手が、平沼さんだったとは…」
「ええ、私も…。とても、とても驚きました」
それから二人は、またお互いの顔を見合って言葉が止まった。
驚きの気持ちが収まってくると、今度は代わりに喜びの感情が沸き上がってきたのだ。
しばらくして、和孝の方が口を開いた。
「ひょっとして、クレーを始めたきっかけは、あの時の僕の…？」
「ええ。実は、そうなんです」
「いやー、まいったな。そうなんだぁ…」
「まいることなんかありませんよ。とても感謝しているんですよ」
「そうなの？」
「ええ、心から…。成人していながら、こんな話をするのも恥ずかしいんですが、今の私は、生まれて初めて自分の意志でやりたいことをやっているんです。だから、そのきっかけを作ってくださった浅尾さんには、心から感謝しているんです」
「でも、あれは別に君に対して何かしようとしたわけではなくて、ただ単に、自分の探究心からだけで…」
「ええ、勿論それはわかっています。でも、浅尾さんに出会ったから、私もクレーに出会えたのです。もし、あの時クレー射撃の話をされたのがあなたではなくて、誰か他の方であれば、私はこれほど興味を持たなかったと思います」
朋佳の説明には熱がこもっていた。
「弓道から何かを学び取ろうと一生懸命に話を聞かれる浅尾さんを見て、クレー射撃がどんなに素晴らしい競技なのかと少し関心を持ちました。その後の学食で、熱く説明される浅尾さんを見て、私は、あなたをそこまで夢中にさせているクレー射撃がどんなものなのかと、なおさら興味を持ったんです」
朋佳は自分でも不思議に思うくらいに心の内を話していた。
「な、なるほど。そうだったんだ…」
「それからの二カ月間は、今までの人生の中で一番充実していました」
そう言い切った朋佳の顔は、確かに輝いていた。

そして、美しかった。
「そ、それは、良かった…。でも…、そうすると、弓道の方は？」
「あれ以来、まったくやっていません。やりたいとも思いません。完全に縁を切ろうとは思いませんが、弓道をやる時間があれば、その時間をクレー射撃の練習に使いたいんです」
「で、でも、それじゃあ。せっかく、国体クラスの実力を持っているのに…」
「気になさらないでください。もともと弓道は、自分でやりたくてやっていたものではありませんから。茶道に活用させようと考えた父に命じられて、お義理でやっていたものなんですから」
「そうなんだ…」
和孝は、そう答えるのが精一杯だった。
自分のとった行動が、結果的にここまで誰かの人生に影響を与えていたとは、考えてもみなかった。だが、理由はどうあれ、その原因は自分にあることには違いなかった。であれば、ともかく自分は自分の出来うる限りのことを彼女にしてあげるしかなかった。
「あれが君の銃？」
一挺だけラックに立てかけてある銃を見て、和孝が訊いた。
「はい。…といっても、亜里沙さんから譲っていただいたものですが」
「そう言われれば、見覚えがあるな。せっかくだから、さっそく撃ってみてくれるかな？」
「はい。お願いします」
朋佳は射撃の準備に入り、和孝は、プーラー室に入った。
「えっ、本当かよ？」
プーラー室の操作パネルを見た和孝は、思わずそう呟いた。
セットしてある飛ばすクレーの設定を見て驚いたのだ。それは、自分達最上級者の使うレベルだったからだ。
そして実際に朋佳の射撃を見始めた数分後には、その設定レベルが決して彼女にとって高すぎてはいないということを彼は知ることとなった。

八．改善点

一時間程後―。
和孝は朋佳を連れて、ＭＪ社の工房の方へ移動することにした。
「これは、僕が持とう」
「あ、大丈夫です。自分で持てます」
「いや。工房まで少し歩くから」
和孝は遠慮する彼女を制止して、銃ケースを代わりに持ってあげた。
彼女は、今日もすでに相当量の練習をしているはずだった。女性の細腕で４キログラム近い散弾銃を持って歩くのはかなりの負担である。
「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて」
車なら五分程度の近さだが、彼はあえてそれを使わずに、徒歩の方を選んだ。長い下り道であるし、彼女と少しでも長く話をしていたかったからだ。

左右を木立に囲まれた山の下り坂を二人はゆっくりと歩いた。上から差し込む木洩れ日が心地よかった。
「驚いたよ、平沼さん。たった二か月で、あのレベルまで上達しているとは…」
「そうなんですか？ 自分ではよくわからないんですが」
「亜里沙さんは、まだ君に言っていなかったのかもしれないけど、今日のクレーの設定は最上級レベルだったんだよ。先週、僕がやった日本選手権と変わらない難易度だよ」
「本当ですか？ 私は、ただ出てきたクレーを捉えることだけに夢中で、亜里沙さんから細かいことは何にも…」
「ははは…。知らぬが仏とは、よく言ったもんだ」
和孝は笑うしかなかった。そして、話を続けた。
「でも、単なるビギナーズ・ラックでないのだけは確かだよ。平沼さんの射撃には、きちんとした基本的な裏付けがある。君の発砲までのプロセスにはすでに完成された形（かた）があると思う」
「以前、浅尾さんがおっしゃっていた形のことですか？」
「うん。それも、クレー射撃の世界では見たことのない独特の形だ。おそらく弓道で培ったものなんだろうね。足踏みからの胴造りは、銃の衝撃に動じない体勢の作り方に通じるからね。引き分けから「会」の段階に入る丹田の呼吸は、真似のできない理想の精神集中法かもしれない。ただ…」
「ただ？」
「ただ、会の段階とその後の「離れ」の考え方がどうしても理解できないんだ。その部分をもう一度説明してもらえないかな？」
「はい、喜んで。…会とは引分けの完成された状態で、発射の機を熟させる過程です。人によって多少の差はありますが、だいたい5～7秒程度の時間です。この間に、丹田の呼吸をしながらすべての煩悩を取り去るんです。そして心を「無」の状態にします。会の時は、的のことさえ忘れなければならず、さらに言えば、「無」の境地であることさえも意識しないようにするんです」
「ええっ、そんなことができるの？」
「ほほほ…。あくまでも、これは理想です。実際にその境地にまで至る方は何人もいらっしゃらないと思いますよ」
「ははは…。そうだよね」
朋佳は続けた。
「程度の差はありますが、とにかくその会の段階でそうやって心を無の状態にして、矢が自然に放たれるのを待つのです」
「そして、この間言っていた「離れ」に入るんだね？」
和孝も、付け焼刃ながら自分なりの勉強はしていた。
「はい。弓を離します。ただし、自分から離すのではなく、あくまでも機が熟すのを待ち、自然に離れていくようにするんです」
「そこなんだ。その点が、一番解釈が難しいと思ったんだ」
和孝が最も関心があり、だが理解に苦しんだ部分であった。
「よく、葉末にたまった雨露が自然に地に落ちるがごとく、と表現されます」

「へぇー、素晴らしい表現だね。感覚としては、よく伝わってくる。確かに、弓道の所作やその精神がクレー射撃に活かされることについては僕も素晴らしいと思っている。でも、現実的に弓と銃とは扱いが違うものだ。特に、決定的に違うのがその離れの部分だよ」
「といいますと？」
「つまり、弓は「離す」だけど、銃は引き金を「引く＝絞る」という動作になるわけだから、言ってみれば、正反対の動作になるでしょ？」
「確かに、そのようになりますね。おっしゃる通りです。実は、私もその部分がしっくりきていないんです」
「やっぱり、そうだったのか…」
　和孝の想像した通りであった。
　朋佳は、現実的にその問題に直面していた。
「実は、たった一つだけ、君の射撃の形に問題があると感じたんだ。それが、その引き金のことなんだよ」
「さっき見ただけで、それがおわかりになったんですか？」
「うん、わかった。君の射撃は、クレーを捉えるまでは完璧なものだった。俊敏な動作で上空のクレーを確実に捉えていた。そこまでは、理想的だった。でも、せっかく捉える所までは完璧なのに、捉えた直後に僅かに散弾の発射が遅れるんだ。そして、さっきクレーを外した時の原因のほとんがそれによるものだったんだ」
「そうなんですか。どのくらい遅れているんでしょうか？」
「ははは…。そう言われると返答に詰まるけど、まちがいないよ。数字では表現できない単位の僅かさなんだけど。零コンマ何秒の世界だよ」
「まあ、そんなに…。でも、遠くから見ていて、浅尾さんはよくそれがわかりましたね？」
「時間の単位で表現することはできないけど、距離でそれがわかるんだ」
「距離？」
「うん。クレーが発射台から放たれてから散弾に打ち抜かれるまでの距離のことだよ。通常は３６メートル前後の地点だ。ところが、今の君は、それよりも５メートル前後長くなっている。つまり、５メートル前後遠くで捉えているんだ」
「遠いということは、遅いということですね？」
「うん。そうなっちゃうね。そして、それはやはり勿体ないことなんだ。捉えるまでの動作が遅いのなら仕方がないけど、充分に間に合っているのに最後の詰めの引き金の段階で遅れてしまっているんだから」
「そうなのですか。やはり、最後の引き金に問題があったんですね。私も、そうではないかと…」
　うつむいた朋佳の顔に木陰が差しかかり、彼女の心境を際立たせた。
「で、でも。指摘した僕がこんなことを言うのも変だけど、あまりそのことを気にしすぎないでね…」
　和孝は焦って説明した。
「仮に、引き金で遅れる原因が弓道の所作にあったとしても、君が人並み外れて射撃の上達が早かったのも、弓道の所作のおかげだったわけだから…」
「は、はい」

「であるとすれば、君の弓道の精神がなるべく活かされるように、対策を考えよう」
「何かいい方法がありますか？」
「君の所作、つまり射撃フォームの面については、これから焦らずに少しずつ改良していこう。その代わりに、今日は一つだけ試してみたいことがあるんだ」
「それは…？」
「君が銃の動作に近づける努力をしていくだけでなく、銃の方も君に近づけてやらなければならないと思うんだ」
「そんなことができるんですか？」
「それをできる人が、日本に一人だけいる。実は、今その人のところへ向かっているんだ」
和孝は、事前にその人物へ電話を入れてあった。

九．もう一人の応援者

山を下りきり、平坦地に差し掛かると辺りには田畑が広がってくる。
そこを抜けると小さな県道のバス通りにぶつかり、それに沿って五分ほど歩くとＭＪ社の工場があった。
工場内の工房には、日本を代表する銃造りの名匠が数人もいた。仮に、この国で銃が一般社会に認知されたものであれば、間違いなく無形文化財に指定されるであろう職工達だ。彼らこそは、ＭＪ社の財産だった。そして、その代表格が田代幸吉であった。
工場の一角に彼の工房が仕切られていた。
「田代さん、ご無沙汰しております」
「おお、和孝君か」
七十歳を超える田代は、老眼鏡の奥から孫を見るような優しい瞳を返した。
「そういえば、この間の日本選手権を獲ったそうだね？」
「はい、おかげさまで」
「それは、よかった。おめでとう。まあ、君の腕なら、少なくともこの二、三年のうちには獲るだろうとは思っていたがね」
「ははは…。ありがとうございます」
「君はいくつになったのかね？」
「二十二歳です」
「そうか…。君のお父さんも獲るのが早かったが…」
「ええ。父の最初の時は、二十三歳でした」
「ほほほ…。そうなると、最年少記録を更新したと言うことか」
「ええ、一応そういうことにはなります。ただ、父はその後、七連覇をしていますから。僕にそこまでの力があるかどうかは…」
「うむ。その気構えで良い。獲ることよりも、守ることの方が大変だというからな。君のお父さんは本当に研究熱心だった。君も、お父さんに習って精進をしなさい」
「はい。そうします」
「ところで、今日はその報告に来たのかね？」

「ええ、それもありますが、別にお願い事がありまして」
そう言って、和孝は朋佳を紹介した。
「平沼朋佳さんです。最近、クレーを始めたんですが、使っている銃が彼女の射撃に合っているのかどうかを、田代さんに見ていただきたいんです」
「宜しくお願いします」朋佳が挨拶をすると、
「成人してからそんなに経っていないようだが、お嬢さんは、射撃を始めてどのくらいなのかね？」
と、さっそく田代が訊く。
「二か月弱ほどです」
「二か月弱？ まだ、初心者のうちなのに、もうカスタム化を考えとるのかね？」
田代が和孝に向かってそう訊いた。
「はい、その必要性を感じました。実は…」
和孝は、一連の流れを田代に話した。
「なるほど、弓道か…。それは面白そうだ。その銃を見せてごらん」
朋佳が銃を渡すと、田代はすぐに気付いた。
「ん…？ これは、昔の亜里沙君のものだね？」
「はい。亜里沙さんの所有する二挺のうちの古い方を譲っていただきました。よくおわかりになりますね？」
「ほほほ…。何千挺あっても、自分が造った銃はすべて頭の中に入っておるよ」
田代が、その片鱗を見せ始めていた。
「では、お嬢さん。さっそく、ここで構えてみてくれ」
朋佳は言われたとおり、その場で銃を構えた。
田代の指示に従って、何度か、構えなおしを繰り返し、五分ほどそれが続いた。田代は、さまざまな角度からそれを確認しながらメモを頻繁にとる。それは、さながら芸術家が人物画をデッサンする様に似ていた。
「うむ。いいだろう。お嬢さん、もう下ろして構わんよ」
「田代さん、どうですか？」
和孝に促されて、田代が大まかな診断結果を話し始めた。
「機関部は後で考えるとして、まずは銃床部と、銃身部を改良する余地があるな」
言いながら田代が道具の棚からメジャーを取り出した。
「すまんが、今度は腕だけを上げてくれ」
朋佳の両手を地面と水平にさせて、今度はテーラーのように腕の長さの寸法を測り始める。そして、またそれをメモにとる。
「なるほど…。お嬢さん、身長はどれくらいだね？」
「百六十二センチです」
「うん、やはりそうか…。失礼するよ」
今度は、頬やあご、そして目の位置を測り、それもメモする。かなり詳細なメモができあがってきた。
「何かわかりましたか？」
朋佳が尋ねる。

「うん。前の持ち主である亜里沙君は、背が高い。従って、腕も長いんだよ。君より十センチくらいは長い。この銃床＝肩に抱える木製の部分は、その彼女にはピッタリにできている。つまり、裏を返せば、君には長すぎるということになるのだ」
「そうなんですか。気づきませんでした」
「まだ初心者の君は、そういうものなのだと思って撃っていたからだろう。だが、実際はとても無理な持ち方をしていたはずだよ」
「そういえば、最初のうちは随分持ちにくいものだと感じていました。おっしゃる通り、そのうちに慣れてしまいましたが…」
「うん、そうだろう。でも、君が銃に合わせる必要はないのだ。銃の方を君に合わせればいいのだよ」
田代は、さっきの和孝と同じことを言った。彼の分析は続く。
「だから、まずこの余分な長さを調整する必要がある。そこで、銃床を少し削ることになるが、かまわないかね？」
そう言われた彼女は、意見を求めるように和孝の方を見る。
「ええ、かまわないです。やってください」
朋佳に代わって、和孝が答えた。
「うん、ではそうさせてもらおう。そうなると、頬を当てるベンドの部分も削り直すことになる。従って目線の先に合わせて銃身を調整すると、やはり銃身自体も少し短くしなければならんが、その点はどうかね？」
「どのくらいになりそうですか？」
「そうだな…。二センチ弱といったところかな」
「彼女なら問題ないでしょう。そうして下さい」
「では、そうしよう。…他に何か希望はあるかね？」
「はい、ひとつだけあるのですが。実は、これがなかなか難題で…」
「言ってみたまえ」
「引き金のタッチの問題です」
和孝は、朋佳の助けを借りながら弓道の「離れ」の考え方を田代に説明した。
「葉末にたまった雨露が自然に地に落ちるがごとく、か…。なるほど、さすがに先人達は素晴らしい表現をするわい。確かに、弓の「離れ」と、銃の引き金を「引く＝絞る」という動作は相対するものだわな。ふふふ…、実に面白い」
田代が静かに目を閉じ、思案に入った。
恭介と朋佳は、じっとその答えを待った。一分、二分と時が進む。途中、彼は何度か「むむむ…」と、唸りのような声を漏らし、それから頷いた。何かを自問し、自答しているようであった。やがて、田代が目を開き、そして口を開いた。
「アイディアはいくつか浮かぶが、引き金のバネそのものの素材をどうこうするような大きな改良は次の「楽しみ」にとっておくとしよう。正直かなり時間がかかるかもしれんからな。とりあえず今回は、今のものでの調整で、できる限りのことをやってみることにしよう」
「お願いします。あの…、調整の日数の方は、どのくらいかかりますか？」
朋佳が不安そうに訊ねた。

「そうだな。四、五日ぐらいかのう」
「四、五日…。そんなに…」
かかる日数を聞いた朋佳が思わず呟いた。
普通なら妥当な日数なのであろう。だが、この二ヶ月間、毎日のように銃に触れてきた今の彼女にとっての四、五日は、その何倍もの日数に感じられるのだ。そんな彼女の胸中を察した、和孝が代わりに交渉した。
「あの、田代さん。できれば少しでも早い方が…」
「うん？　君は、この美しい娘さんの前で格好いいところを見せる為に、七十歳を超えるこのわしに、一番大切な睡眠時間を削ってでもやれと言うのかね？」
「い、いや。そこまでは…」
和孝が焦って希望を撤回しようとした。
「ははは…。冗談だよ。今のお嬢さんは、いっ時の時間も惜しいようだね。では、最優先でやったとして、三日ということで手を打ってくれんかね？」
「はい、ありがとうございます。それで充分です。無理を言ってすみません」
朋佳と和孝が嬉しそうに顔を見合わせた。
それは、朋佳にとって人生で最も長く感じられる三日間かもしれなかった。自分に合うように改良される銃を手にするのが、待ち遠しくて仕方がなかった。

十．紋無しの羽織

世田谷、成城―。
小田急線の成城学園駅から北に広がる高級住宅街の一角に、ひと際目立つ邸宅があった。豪奢な洋風の邸宅が立ち並ぶ中で、その一角だけは純和風の門構えだった。贅沢に飾られているわけではない。さりとて、決して控え目とはいえない。堂々たる風格がある。そして、このような家に住むのはどのような生業の人物なのかと訊ねられた時に、誰もが納得する答えになるだろう。ここは、四百年以上の長きに渡って続く、茶道の一大流派の家元・平沼玄雲の宅であった。
帰宅した平沼朋佳は車を車庫に入れ、歩いて玄関に回る。
「多恵さん、ただいま！」
そう言って玄関から二階にある自分の部屋に向かおうとした時、お手伝いの多恵に声を掛けられた。
「おかえりなさいませ、お嬢様。あの、大先生がお待ちですよ」
「お父様が？」
「はい、書斎の方でお待ちです」
「待っている？　…何かしら？」
首をかしげながら、朋佳は庭に面した父の書斎に向かった。
「お父様、朋佳です」
「うん。入りなさい」
襖を開けて、中に入る。中央に大きな卓がある十六畳ほどの広さの部屋だった。向かっ

て右側には大きな床の間があり、正面には丸い形をした障子窓がある。玄雲は、その丸窓の下に誂えられた小机に向かって書き物をしていた。
「そこに座りなさい」
玄雲が、背中越しに言う。
その背中には絶対的な威厳が表れていた。その羽織の背には紋が入っていない。いないからこその権威である。即ち、流派二万人余の一門の中において唯一、家元の彼のみが着用を許される紋無しの羽織、十徳である。
「はい…」朋佳は卓の入り口側に座った。
彼女の目は自然と卓の上に置かれた一通の封筒に注がれる。よく見れば、それは彼女に宛てた封筒であった。それを手にした朋佳は裏に書かれた送り主を見る。成城警察署からだった。
「うん。用向きとは、その封筒のことだ。その中身は何だね？」
訊きながらも、彼はまだ小机に向かったまま、小筆を走らせている。
「これは…」
朋佳は、いったん言葉を詰まらせた。
送られてきたタイミングから考えて、銃関係の書類である可能性が高かったからだ。無論、クレー射撃をやっていることは父には伏せている。絶対に知られてはいけなかった。だから、その点には充分に注意して日々行動していた。だが、だとすれば彼は何故この封筒にこだわるのだろうか。
「これは、車の免許の関係の書類だと思いますが。何故、お父様はわざわざこの中身を気にされるのですか？」
機転を利かせて彼女は車のことを持ち出した。
だが、その場しのぎの言い逃れの通用する相手ではなかった。筆を止めた玄雲は静かに目を閉じ、そしてやっと朋佳の方に姿勢を向けた。
玄雲は無表情だった。
少なくとも自分の娘に向けるような顔つきではなかった。朋佳は父のその表情を知っていた。それは、茶を点てる時と同じ表情だった。だとすれば、今の彼は何か重要な事柄に気持ちが集中しているということだ。それで彼女は、抜き差しならぬ状況なのだと察した。
「本当に車関係の書類なのかね？」
「それは…」
「では、訊くが。それならば、何故差出人が交通課ではなく生活安全課なのかね？ もし車関係なら、交通課なのではないかね？」
玄雲の指摘の通り、成城警察署の名前の下には生活安全課とあった。
「え、ええ…。確かに、そうかもしれませんが。でも、それ以外の心当たりは…」
苦し紛れにそう答えながらも、朋佳は隠すことへの限界を感じ始めていた。
「では、ここで封筒を開けて、中身を見せてもらおうかね。車関係の書類ならば、さしさわりがないだろう？」
やはり、これが限界であった。
「ごめんなさい。お父様のおっしゃる通りかもしれません。実は、車以外の心当たりがあります」

朋佳は、観念した。
玄雲の表情に一瞬だけ悲しみが現れたような気がした。
「開けて見なさい」
玄雲の指示に、朋佳は黙って従った。封を切る手が少し震えた。
はたしてその中身は、銃の関係の書類だった。点検の日程を知らせる通知だった。年に一回は、所持する銃の点検を所轄の警察署で受けなければならないのだ。
「見せなさい」
それを受け取った玄雲が書類に目を通した。
完全な無表情に戻っている。
「つまり、おまえは散弾銃を持っているということかね？」
読み終えた彼が訊いた。
「はい、持っています。黙っていてごめんなさい」
「何の為にだ。まさか、おまえが狩猟をやるとも思えんが？」
「ええ。勿論、狩猟の為ではありません。クレー射撃をする為です」
「ほう…。クレー射撃と…」
意外なことに、それを聞いても玄雲には特別な驚きは見られなかった。
玄雲には察しがついていたからだ。
数日前、朋佳が不在の時に、成城警察の生活安全課の職員が突然訪問して来た。
規則に順じて、唯一の身内である玄雲本人が応対することになった。そして、彼らから娘の銃の保有についての話を聞かされたのだ。その書類には、彼女の銃の保有目的が記されていた。狩猟ではなく、「標的射撃」とあった。即ち、クレー射撃である。
銃の保有者が受けなければならない定期的な点検は、本人との面談に留まらない。保有者が適格者であるかどうかの判断は、本人以外のその周囲の人間からの情報によっても裏付けられる。その場合、所轄の警察は、同居している近親者にまず聞き取りを行う。そしてそれは、本人には知らされずに行われることが多いのである。
「それは、女性でもできるスポーツなのかね？」
玄雲が静かに訊いた。
「はい。つい数年前から、女子も正式な競技になりました」
「なるほど。で、おまえも始めたということか」
「はい」
「格式ある茶の宗家の長女が、クレー射撃か…。私はとても違和感を覚えるのだが、おまえはそうは思わんかね？」
「それは…」
朋佳は、一瞬絶句した。
今までなら、この時点で事は決着していただろう。父親の正論に圧倒され、そして、彼女が引き下がるのだ。二十年間、変わらぬ光景であった。
だが、この日は違った。朋佳は、腹をくくって続けた。
「見ようによっては、確かにお父様のおっしゃる通りかもしれません。でも、私はクレー射撃がどうしてもやりたいのです！」
「なっ…！」

普段は決して見せたことのない彼女の強い口調に、さすがの玄雲も驚かされた。
娘が自分の意志をここまではっきりと主張したのは記憶にないことだった。それから、しばらく二人の間に沈黙が続いた。
「やっては駄目なのですか、お父様？」
いたたまれなくなり、彼女が訊いた。
「私としては、やるべきではないと思う」
玄雲はきっぱりと言った。
「お願いです。やらせてください！」
朋佳が食い下がった。
「いいかね、朋佳。私の立場を考えてみよ。流派の会員の中には、日本の古式ゆかしい様式美に憧れて入会している者が沢山いるのだぞ。海外の会員については、それこそほとんどがそうだ。その会員達に、何と申し開けばいいのだ。宗家の長女は、西洋の鉄砲に興じているとでも言うのか？」
彼の話にはいつもながらの説得力があった。
非の打ちどころのない正論であった。
「では、どうしても認めていただけないのですね」
「ああ、認められん！」
こうなってしまうと、もう後戻りはできなかった。
「そうですか。…わかりました」
彼女は覚悟を決めたようだった。
「わかってくれたか…、朋佳。クレー射撃のことは諦めてくれるな？」
玄雲の表情に、少しだけ笑みが差した。
聡明なこの娘なら、ここまで説明すれば充分に理解してくれるはずであった。
朋佳が、正座を組み直した。
「申し訳ありません、お父様。私、たった今決心をいたしました。いいえ。以前から、もしこうなった場合どうするのかをすでに決めておりました」
「どうしようと言うのかね？」
「この家を出ることにします」
「な、何だと？」
それには玄雲も慌てた。
想像を超える返答だった。自分の娘の返答の中に、そのような選択肢はないはずだった。
「私は、クレー射撃を辞める気はありません。でも、そのことで宗家にご迷惑がかかると言うのなら、仕方がありません。この方法しかありません」
背筋を伸ばし、彼女がきっぱりと言い切った。
その態度には、その覚悟が生半可ではないことが見て取れた。
「むむむ…」
しばらく玄雲は、地鳴りのような唸りを上げていた。
だが、次の言葉が出てこない。想像を超える展開に、二の句が告げられないでいるのだ。
彼自身、自分の娘に限らず、相手にここまで刃向われたことがなかった。茶の世界においての自分の発言は、法律と同じだった。それは、先人達から脈々と受け継がれてきた絶対

的なもののはずであった。
玄雲は、立ち上がった。そして、鬼の形相で娘を見下ろした。まさに、仁王立ちだった。十徳の羽織が、こみ上げる怒りと混乱で小刻みに震えていた。だが、それでも見上げる娘は負けぬ眼光で返してきていた。
「かっ…！」
彼は、勝手にしろと、言いかけた。
だが、その言葉をぐっと飲み込んだ。そして、ドカドカと足音を立てて部屋から立ち去った。
そのまま玄雲は、庭の一角にある茶室に小走りに向かった。
しばらくして、茶室の中から大きな音が聞こえた。壁に投げつけられた茶碗が割れる音だった。

十一．銃の聖地

その日の夜―。
朋佳は、広尾にあるマンションの一角に車を停めた。
間違いなく超のつく高級マンションではあるが、その外見には無駄な装飾がない。それが、逆に格の高さを感じさせていた。
エントランスの入り口にあるインターホンの脇の暗証コードを慣れた手つきで押す。コードは、アルファベットと数字の組み合わせになっている。亜里沙のAと数字は彼女の誕生日だった。朋佳はすでに何度も訪れていてすっかり覚えてしまっていた。中に入り、目的の階まで上がる。
玄関のチャイムを鳴らすと、近衛亜里沙が笑顔で出迎えてくれた。
「いらっしゃい。よく来たわね」
玄関には靴を脱ぐ為の段差がなかった。ここは、外国人専用のマンションだからだ。
相変わらず広いリビングだった。日本の規格とは違う大きなガラスサッシから、東京の夜景が一望にできる。
「まあ、綺麗！」
映画館のスクリーンを眺めるように、しばらく朋佳はガラス越しにその夜景に見入っていた。何度も来てはいたものの、夜暗くなってから来るのは初めてだったからだ。
そのうちに亜里沙がティーセットを持ってリビングに戻ってきた。
「さあ、どうぞ」
彼女が、いつもポットに入れて持ち歩いているのと同じハーブティーだった。
「夜景がきれいですね」
「あ、そうか…。朋佳さんは、夜に来るのは初めてだったのね？」
「はい。そうなんです」
「この夜景は、儲けものだったわ」
「ということは、ここを選ぶ時にそれは条件には入ってなかったんですか？」
「ほほほ…。そうなの、全然入っていなかったのよ。ここを選ぶ時の父は、セキュリティ

のことしか考えていなかったわ。一番安全性に優れているという理由だけで、ここに決めてしまったの。外国人専用のマンションだったけれど、たまたま私も父も、半分イタリア人だったから、審査にも通ったってわけよ」
「そうだったんですか。じゃあ、夜景は後で付いてきたんですね？」
「ええ、そうなの。父の頭の中には、私の安全のことしかなかったのよ。自分はほとんど住むことのないマンションだからね」
「お父様は、イタリアにいることが多いんですか？」
「そうね。一年のうちの大半はイタリアで過ごしているわ」
「やっぱり、その方が銃のお仕事に便利だからですか？」
「ええ、勿論それも大きな理由のひとつよ。日本に比べて、他の国への移動が楽だしね。それに、その町全体が銃で成り立っているようなところだから」
「何と言う町ですか？」
「ブレシアよ」
「ブレシア？」
「ええ。場所のイメージとしては、オーストリアに近いイタリアの北部よ。ミラノの東側になるわ。大都市ではないから、一般の人にはあまり知られていないでしょうね。でも、そこには歴史のある銃の工房がたくさん集まっていて、言ってみれば、銃の聖地といったところね」
「銃の、聖地…？」
朋佳は、その言葉の響きに強く反応していた。
「ええ。父の事務所も、私の叔父の工房も昔からそこにあるの」
「何か、凄くロマンを感じます」
石畳が敷き詰められたヨーロッパの伝統的な古い街並みが、頭に浮かぶ。
そして、つい昨日訪れたＭＪ社の工房や田代のこと、そして、和孝の顔も頭に浮かんだ。
「そうね。おそらく、あなたのその想像通りのところだと思うわ。しかも、自然が素晴らしいところなの。北側にはアルプス山系が広がっていて、そこら中に手のくわえられていない自然のままの湖があるのよ」
「素敵だわ、見てみたいわ」
朋佳は、今度はその風景を思い描いて、呟くように言った。
「ちょっと、待っていてね」
そう言うと、亜里沙がソファを立った。しばらくして、鉄製のクッキーの箱を手に戻ってきた。箱にはＦＯＴＯというシールが貼ってある。
「わけがあって、あまり写真はたくさんないのだけど…。何枚かは、イメージが沸く写真があるかもしれないわ」
箱の中から、何枚かを選んで朋佳に渡して見せる。
「まあ、素敵。まるで絵葉書だわっ！」
朋佳はその写真の風景を見て、感嘆の声を上げた。
まさにそのどれもが、アルプス山系の観光写真のようであった。違うのは、どれにも同じカップルが一緒に写っていることだ。
「ご両親ですね？」

その女性の方の顔を見れば、すぐにそれとわかる。
「ええ、そうよ。父の慎一郎と母のマリエッタよ」
「亜里沙さんは、本当にお母様にそっくりですね」
「ええ、そうね。皆に言われるわ」
「お父様は、本当に半分日本人ですか？ この写真で見ると、まるで普通にイタリア人のように見えますね」
「ほほほ…、そう見えるかもしれないわね」
「湖畔での写真が多いですね」
「父と母が知り合った頃は、その小さな湖で毎日のように愛を育んだからよ」
そう朋佳に説明した時、亜里沙はふと、あることに気づいた。まさに、今の自分と玉木恭介との日常が、両親の恋人時代と同じだったからだ。血は争えないと、彼女はつくづく思った。思いながら、彼女は胸が熱くときめくのを感じていた。
「本当に何から何までロマンチックだわ。まるで、映画や恋愛小説の中の世界のようですね」
そんな亜里沙の心境を知るわけでもなく、朋佳はただただ感激していた。
「そうね、確かに。それにね…」
亜里沙が、ハーブティーの入ったカップの中を見ながら、続けた。
「父がイタリアに居たがる一番の理由は、母のお墓がそこにあるからだと思うわ…」
「お母様の…。そのブレシアにあるのですね？」
「ええ、そうなの。だから、きっとそうだと思うわ。父は、私には言わないけど…」
「亜里沙さんのお父様は、本当に素晴らしい方なんですね」
朋佳がしみじみと言った。
「ほほほ…、そうかしらねえ」
亜里沙は素直には認めないものの、少し嬉しそうだった。
それに対し、朋佳の方は浮かない様子だった。
「ええ。亡くなった奥様への深い愛情もそうですし。それから、このマンションを決めた理由にしても、亜里沙さんのことを心から大切に考えて下さってのことです。本当に羨ましいわ。それに比べて…」
その様子を見ていた亜里沙は、朋佳の突然の夜の訪問の理由がわかったような気がした。彼女は、自分の父親と何か抜き差しならないことがあって、ここに逃げ込んできたのかもしれないと。
「ほほほ…。マンションのことは確かに私の身を案じてかもしれないけど、父にはトラウマがあるのよ」
「お父様に、トラウマ？」
「ええ。実は、私は小さい頃に誘拐されかけたの」
「まあ、本当ですか？」
「そうなのよ。しかも、狙っていた相手はソ連のＫＧＢだったのよ」
「ＫＧＢって、あの…？」
「そう。秘密警察」
「ええっ。いったい何故、そんな相手に？」

驚くなと言う方が無理だった。
「ふふふ…。さあ、何故でしょう？」
対して、亜里沙の方はにやにやと含み笑いをしている。
「あっ、ひょっとして冗談なんですか？」
「さあ、どうでしょう。ふふふ…」
「もう、亜里沙さんったら。いつもそうやってごまかすんですから。本当は、どっちなんですか？」
亜里沙は、生真面目な朋佳がその話に翻弄されるのを楽しんでいるように見えた。だが、実はそれは、彼女をリラックスさせるための行為であった。
「ほほほ…。その答えは、いつかお話するわね。ただ、そのトラウマのせいでこんな要塞のようなマンションを選んだのは事実だと思うわ…」
「ええ。いつか、是非聞かせてください」
朋佳は、亜里沙のその話が、やはり事実であったような気がしてならなかった。
「さて、朋佳さん。今度は、あなたの方のお話を聞かせてもらいましょうか。ひょっとして、お父様と何かあったのでは？」
亜里沙が、いつもの姉役に戻って訊いた。

十二．一体化

この日、ＭＪ社の射撃場には和孝に加えて田代幸吉も同席していた。
朋佳は、プレゼントの包みを開ける子供のような表情で、改良されたその銃と対面した。四日ぶりに対面したその銃は、少しスリムになっているような気がした。今度は、愛しいわが子を寝かしつける母親のような素振りでその銃を優しく撫でる。
「持ってみてもいいですか？」
「ああ、いいとも」
さっそく彼女は、構えて見る。
「どうかね？」
「ええ、少し軽くなりました」
「うん。そうだろう。頬の当たり具合はどうだね？」
「とても、いい感じです」
彼女は構えながら上下左右に体を動かし始めた。
改良前とは比べ物にならない程、心地良いフィット感だった。
「銃床そのものもまだ微調整をする余地があるが、それはもう木を削らなくてもリコイルパット＝ゴム製のクッション材の調整でできるから、あっという間だよ。君の体型と銃全体のバランスを考えながら、銃身も少しだけ短くした」
「とても扱いやすいです。まるで、以前のものとは別の銃のようだわっ！」
朋佳は、声を弾ませていた。
その様子を和孝と田代は、笑顔で見守っていた。
「平沼さん。引き金の具合は、実際に撃ってみてでしかわからないし、さっそく撃ってみ

ようか？」
「はい。是非っ！」
和孝がプーラー室に向かった。
やがて、朋佳がその銃で射撃を始めた。
はたしてその結果は、興奮して思わず叫んだ彼女の言葉に集約されていた。
「凄いわっ。銃が、体の一部になったみたい！」
改良したての銃を使ってにもかかわらず、彼女の射撃は著しい飛躍を見せた。予想していた反応とはいえ、田代も思わず笑顔になった。
「ははは…。それは良かった」
和孝も、プーラー室から飛び出て来た。
「目に見えて良くなったよ！」
二人に向かって、興奮気味に話す。
「うん、うん。お嬢さん、引き金の方はどうかね？」
「前よりも、ずっと自分の感覚に応えてくれるようになりました」
「そうか。まあ、今回はたいしたことはしておらんがのう。引き金の力をぎりぎりにまで軽く設定してみた。１．２キログラムだ。まあ、安全性を考えると、このあたりが限界だろう」
「良かったね、平沼さん」
「はい、想像していた以上でした。田代さん、本当にありがとうございました！」
彼女の嬉しくて仕方がないという気持ちが、全身からにじみ出ていた。
「うん。これからも、改良を加えていこう。余地はまだありそうだ」
「あの…。できれば、もう少し…」
朋佳が申し訳なさそうに言いかけた。
「はいはい。了解ですよ」
もはや、彼女の言いたいことは分かり過ぎるほど分かっている和孝が、プーラー室にＵターンした。
朋佳が再び射撃を始めると、田代はプーラー室の和孝の元へ移動した。
「和孝君。あのお嬢さんは、実戦経験はまだなのかい？」
「ええ、まだです」
「すぐに、経験させた方がよいな」
「はい。実は僕も今、それを考えていた所です」
「やはり、君もそう思うか…。もし、実戦向きであれば、彼女はかなりの選手になる可能性を秘めておる」
「ええ、僕もそう感じています」
「あのお嬢さんは、希有な才能がある。それに加えて、和紙が水を吸い取るがごとくに理解し、習得しよる。伸び代は計りしれん。実に、楽しみだ…」
「まったく同感です」
プーラー室でのそんな二人のやりとりを知る由もなく、朋佳は生まれ変わった自分の銃の感触に夢中になっていた。
その夜、朋佳はその銃をベッドの中に持ち込んだ。

うっとりと、銃に頬ずりをする。
そして、それをまるでぬいぐるみの人形のように抱きながら、満足げに眠りについた。

十三．特別な招待客

土曜日の昼時―。
三上邸の広い芝生の庭は来客達で賑わっていた。
長くつなげられたテーブルの中央には、この邸の主である三上恵造と夫人が座り、その横にはこの日の主役である浅尾和孝が座る。更にその隣には三上謙作が座り、その向かいには近衛亜里沙と朋佳、そして五十嵐美穂が並んでいた。
庭の手前の駐車スペースには、黒塗りの運転手付の公用車が停められていた。一人のＳＰが、その車の周囲に目を光らせて警護している。車の中で電話をしていた男が、要件を済ませると後部座席から降りてやって来る。
熊を思わせるような風袋のぎょろ目顔の大男だ。
「予定通りだ、三上。もうすぐ到着するぞ」
その大男が、それに似合わぬ人懐っこい笑みを浮かべて三上恵造にＯＫサインを作って見せた。
「ご苦労さん」
恵造は、笑顔でそれに頷いて返した。
恵造の大親友である工藤辰夫は、現職の茨城県知事であった。
「えっ、辰夫おじさん。まだ他に誰が来るんですか？」
そのやり取りを見ていた和孝には、恵造と辰夫が呼んだ招待客の見当がつかなかった。
「もうすぐ来るぞ。楽しみにしていろよ、和孝。俗に言うサプライズ・ゲストってやつだよ。わはははは…」
辰夫が、大きな体を震わせてダイナミックに笑う。
「でも、辰夫おじさん。サプライズ・ゲストって言っても、今日は身内だけのお祝い会でしょ？」
謙作もそう言って不思議がる。
が、目の前の朋佳と美穂の存在に気づいて、あわてて訂正する。
「あっ。平沼さん達は、特別だからね。主賓の和孝の友達だから…」
「いえ。どうか、気になさらないでください」
朋佳も美穂も、まだ少し緊張気味だった。
「そうよ、謙作君。それに、朋佳さんは私の妹分でもあるのですからね。私達の家族同然なのよ」
そう念を押す亜里沙は、謙作にとって子供の頃から姉のような存在だった。
「わかっていますよ、亜里沙さん。それにしても和孝の奴、俺を出し抜いて、いつの間にこんな素敵な彼女を…」
「ち、違うよ、謙作。彼女なんかじゃないよ。平沼さんに失礼だろう」
和孝が慌てて否定する。

「ははは…、よく言うよ。どう見ても彼女だろう。それにこの前の福島の射撃場で、素敵な人だって、練習そっちのけで平沼さんの話ばかりしていたじゃないか。まったく、よくそんな調子で、日本選手権が獲れたもんだ」
大会前の調整練習の時のことを、謙作が忘れるはずがなかった。
その時の和孝は、練習のことも忘れて、目を輝かせながら朋佳の印象を熱く語っていた。
「おい、謙作。そんな話しは、こんな所で…！」
和孝の声が上ずった。
「えっ、そうなの？　朋佳ったら。やっぱり浅尾先輩と、そうなっているの？」
それを聞いた美穂も、驚いて訊ねる。
初対面での好印象に加えて、日本チャンピオンになったことで、美穂の和孝への評価はウナギ登りだった。当然、親友の朋佳も自分と同じ気持ちだと思い、何度も彼と付き合っているのかと問いただしていたのだ。しかし、その都度、朋佳からは笑って否定されていた。素晴らしい人で、尊敬できる人だが、まったくそんな気持ちではないと言う言葉しか返ってきていなかったのだ。
「えっ、違うよ、美穂。そんなのでは…」
朋佳が慌てる。
「そ、そうだよ。馬鹿なことを言うな、謙作。あれは、おまえが平沼さんのことを聞きたがるから話しただけで…」
和孝も、慌てて否定しようとするが、朋佳はすでに真っ赤な顔になっていた。
「ははは…。それならそれで、いいじゃないか。それより、謙作。おまえ、福島の射撃場に行ったのか？」
謙作の父・恵造の素朴な疑問のひと言が、窮地の二人を救った。
「い、いや。あれは、和孝に頼まれて付き合っただけだ。俺はやっていないよ。見ていただけだよ」
今度は謙作が、慌ててそれを否定した。
自分がクレー射撃をやっていることは、恵造には絶対に知られてはまずかった。
「本当か？　まだクレーに興味があるのなら、サーフィンはそろそろ卒業して会社の手伝いの方を…」
と、恵造がいつもの口癖を言いかけた時だった。
入口に車が一台入って来た。やはり工藤辰夫のと同じタイプの黒塗りの車だった。
「おっ。サプライズ・ゲストが到着したな」
辰夫が嬉しそうに言った。
その車は、彼が用意させた公用車であった。
運転手がドアを開け、慣れたように車を降りたのは、仕立ての良いスーツを着込んだ見るからに品のいい五十歳前後くらいの男性であった。歩いて来るその男性を見て和孝が叫んだ。
「あっ、お父さん！」
「おう、和孝！」
返事をしたその男性は、和孝の父、浅尾義和であった。
「工藤さん、三上君！」

義和は嬉しそうに、二人に会釈しながらまるで十代の少年のように走り寄った。
「よう、浅尾君！」
席を立った二人も義和に走り寄って出迎える。
三人の旧友は、笑いながら何度も固く抱き合った。その様子は、高校時代とまるで変わりがなかった。
その後、義和が亜里沙、謙作と順に挨拶を交わした所で、和孝が朋佳達を紹介した。
「お父さん、こちらは平沼さんとその友達の五十嵐さん」
「始めまして。平沼朋佳と申します」
「五十嵐美穂です」
「こんにちは。和孝の父の浅尾義和です。…ええと、和孝とはどのような？」
「私達は、学習院大学の後輩です。で、朋佳の方は、今、浅尾先輩にクレー射撃を教わっています」
こういう場面では、いつものように美穂の方が説明役になる。
「ほう、そうなんですか。平沼さんはクレー射撃を？」
義和は、すぐに朋佳に関心を持ったようであった。
「はい、和孝さんに手ほどきをしていただいております。まだ初心者ですが」
「そうですか。クレー射撃は楽しいですか？」
「はい。それは、とても！」
そう言わずとも、朋佳の素晴らしい笑顔が何よりもそれを物語っていた。
義和はすぐに彼女のことが好きになった。
「それは、よかった。私も大好きなんですよ。あとで、ＭＪの射撃場の方へ行こうと思っています。あなたも是非ご一緒してください。その時にゆっくり話をしましょう」
「はい、光栄です。喜んでご一緒します」
義和は、日本チャンピオンになった息子の和孝と一緒に射撃をするのを内心楽しみにして来ていた。
「それにしても驚いたな。東京に仕事のついでかなんかがあったの？」
義和が来ることを知らされていなかった和孝は、まだ驚きを隠せない。
普通なら、義和は福岡県の自宅にいるはずだからだ。
「いや。純粋におまえの初優勝を祝福する為に、福岡から来たんだよ」
義和は平然と言う。
「ええっ、本当に？ その為にわざわざここまで来てくれたの？」
「そうだよ。でも、たいしたことはないさ。お父さんが若い頃は、しょっちゅう福岡からここに通って来ていたからな。しかも、今回は格段と楽だったし…」
「楽と言うと？」
「うん。福岡からここまで二時間くらいだった」
「まさか、そんな。どうやってもそれは無理でしょう？」
和義が、隣の謙作の顔を見て意見を求める。
「そうだよな…。福岡県からこの茨城県の友部までだと、どんなに急いでも、まちがいなく倍以上はかかるよ」
謙作も首をひねる。

「ふふふ…。それが、かからないのさ」
そう言って小さく笑いながら、義和が工藤辰夫の方を見た。
「わはは…。では、わしが種明かしをしてやろう」
言いたくて仕方がないといった風に、辰夫が説明を始めた。
「確かに、通常のように福岡から羽田まで飛行機を使い、羽田からここまで来れば、四時間以上はかかる。だが、もし、福岡からここの隣町まで直接飛行機で飛んで来れたとしたら、どうだね？」
辰夫が和孝達に訊ねた。
「勿論、もしそうなら、二時間くらいで来れるでしょうけど…。でも、辰夫おじさん。茨城には、ましてこの近くにはそんな大きな飛行場なんてないじゃないですか？」
「わはははは…、それが、あるんだなぁ」
辰夫は自信たっぷりだった。
「謙作。おまえ、聞いたことあるか？」
「いや、聞いたことがないよ」
和義と謙作は、再び顔を見合わせて首を横に振り合う。
「わはは…。君達、百里基地を忘れてはおらんかね」
「ええっ。だって、あそこは自衛隊の基地でしょ？」
「うん、確かに今はそうだ。だが、ごく近い将来に民間との共用化を計画しているんだ。実はもう、事業化の法案も県議会で通してある。今はその実験段階なのだ。それで、手始めに福岡から浅尾がチャーター便を用意したのさ。あとは、基地のある小川町からここまでは車で四十分弱ということさ」
「凄いや。それだと、確かに二時間ですね！」
「だろう。義和の財力とわしの権力を合わせれば、ざっとこんなもんじゃ。わはははは…」
辰夫が得意顔で豪快に笑った。
「へー。工藤のおじさまって、見た目通り、ダイナミックな発想と行動のできる方なんですね」
話を聞いていた美穂が感心してみせる。
「そうか、そうだろう。なかなか物事のよく分かるお嬢さんだ。気に入ったぞ、わはははは…！」
気分を良くした辰夫が、更に豪快に笑った。
その光景を見ていた亜里沙は嬉しかった。
彼女の日本の父ともいえる工藤辰夫は、もともと観光業が本業であった。それは、彼女の本当の父・近衛慎一郎の意志を継いだものであった。彼は慎一郎への固い友情の証しとして、その観光会社を茨城県一にするという夢を実現していた。いや、もはやそれ以上かもしれなかった。百里空港の開港は、国内線はおろかアジア圏の国際線航路も視野に入れていたからだ。
「でも、お父さん。こんな身内の会の為に飛行機のチャーターまでさせちゃって、すみません」
「なあに、たいしたことではないさ。おまえだけでなく、工藤さんや三上家の皆さんや亜里沙ちゃんとも会えるしな。それに、僕が初めて日本選手権を獲った時も、こうして皆が

集まってお祝いをしてくれたんだ。あの時なんかは、近衛さんはわざわざイタリアから駆けつけてくれたんだ。しかも、身重の奥さんを連れてまでしてだ。それに比べれば、こんなのはどうってことないさ」
「ええっ。マリエッタさんは、その時、身重だったんですか…？」
三上謙作が、義和に訊いた。
「ええ、そうでしたよ。あの時は、僕達も驚きました」
浅尾義和が、当時を懐かしむかように大きく頷いて答えた。
「ということは、亜里沙さんは、この会に出席するのは二回目ってことですね」
「なるほど…。謙作君、よく気がつきましたね。言われてみれば、確かに、そういうことになりますね。ははは…」
これには、その場の全員が大笑いになった。
正確に言うと、人物関係がよくわかっていない五十嵐美穂を除いてだ。
「ねえ、朋佳。そのマリエッタさんというのは？」
「亜里沙さんのお母様よ」
「じゃあ、近衛さんというのが…？」
「マリエッタさんの旦那様の近衛慎一郎さん。つまり、亜里沙さんのお父様よ」
「あはは…、そう言うことか。それで、二回目ってことね。それは、おもしろいわ。あはは…」
朋佳の説明で話の流れを理解した美穂が、皆よりかなり遅れて笑いだした。
それにつられて、皆がもう一度大笑いをした。
「慎ちゃんか…。今回は来られなかったな…」
笑いが一段落すると、思い出したように辰夫が呟いた。辰夫は、クレー射撃の絶対的王者「男爵」のことを世界で唯一愛称で呼ぶ男だった。
「ああ、そうだな…」
「ええ。それだけは、残念です…」
他の旧友達も同様に肩を落とす。
その様子を見ていた朋佳は、四人の男達の絆がいかに深いものなのかを感じ取った。そして彼女は、ここにいるそうそうたる男達をも、それほどの気持ちにさせる男爵＝近衛慎一郎というまだ見ぬ男に興味を抱かざるにはいられなかった。
「おじさま達、本当にごめんなさい。父も、とても残念がっていました」
気落ちした三人に、亜里沙が父親に代わって陳謝した。
「今は、一切のマスコミや関係者とも接触を断っている手前、イタリアを出ないようにしているの。最近は、立て続けに試合の出場をキャンセルしているので、ちょっとした騒ぎになり始めていて…」
「うん。いいんだ、いいんだ。わかっているよ、亜里沙。今回は、義和が福岡から駆けつけてくれたんだ。それで、よしとしよう」
辰夫が、小さくＯＫマークを作って笑顔で返した。
「ねえねえ。ちょっと待って、おじさま。そういえば、さっきも「財力」とか、「福岡からチャーター」とか、凄いことをおっしゃっていたけど…。浅尾先輩のお父さまって、まさか、あの九州の浅尾財閥の…？」

まったく別の部分に興味を持った美穂が、思い出したように辰夫に訊いた。
「気になるのかい、お嬢さん。まあ、世間ではそう言っておるようだが、わしにとっては、義和は今でも可愛い子分さ。わっはは…」
辰夫が、誇らしげに笑った。
「浅尾先輩、本当なんですか？」
今度は、和孝に直接確認する。
「ま、まあ。たぶん、そうだと思うけど…」
和孝が遠慮がちにそう答えながら父の方を見るが、当の義和は、ただニコニコと笑顔を浮かべるだけであった。
「やっぱり、本当なんだ。もう、先輩。だったら、なんで始めからそういってくれなかったんですか？」
美穂は、不服そうに頬を膨らませる。
初対面の時に、猜疑心から和孝のことを格下扱いにしてしまった。だが、そうではないとわかった今、自分はとても恥ずかしいことをしてしまった立場になるからだ。
「ははは…。ごめんね、美穂さん。でも、普通そんなこと自分からは言わないよ。それに、別に僕が作った財閥グループってわけでもないし…」
九州において、浅尾グループに並ぶものはなかった。
浅尾家の家系は、遠く戦国の世にまで遡る。明治維新までは、九州北部の正式な領主であった。平成の世の今も、実質的にはそれは変わっていない。一族の経営する企業グループは、鉱業や建設などの幅広い分野でこの地方の基幹になっている。今も、この地方は浅尾家の城下町と言ってよかった。そして、浅尾義和はその城主であった。
「もう、浅尾先輩ったら。控え目な性格にもほどがあるわ。朋佳も、全然教えてくれなかったし。本当に、私はいつも蚊帳の外なのね」
親友と憧れの先輩に、自分だけ蚊帳の外に置かれたと思い込んだ美穂は、ふくれっ面のままだ。
「美穂、それも違うって。私だって、今始めて聞いたの」
「本当に？」
「ええ、本当よ…。それに、だとしたら私の父は、和孝さんのお父様のことをよく知っているわ」
それには、義和の方が大きく反応した。
「何ですって、平沼さん。ひょっとして、あなたのお父様は、あの茶道の家元の…？」
「はい。平沼玄雲です」
今度は、義和が驚く番であった。
「あなたが玄雲先生の…。これは、驚いた。なんという偶然でしょうか！」
「なんだ、義和。そのお嬢さんの父上とはそんなに親しい間柄なのか？」
辰夫が訊いた。
「はい、親しいもなにも…。私個人だけが親しいと言うよりは、浅尾家と平沼家は何代にも渡って親交が続いているんです」
「何代にも？」
「ええ。茶道は、武道と共に一族の嗜みとして必須のものでした。それこそ、私の父も祖

父も、曾祖父も、その先代達も、みな茶道は平沼流なのです」
「なるほど、そいつは桁違いに長い付き合いだわな。わはははは…」
豪放磊落な辰夫にかかれば、数百年に渡る名家同士の歴史も、長い付き合いのひと言で片付けられてしまう。
「ところで、玄雲先生は、お変わりありませんか？」
義和は、ごく普通にごく普通の近況伺いをしたつもりだったが、
「え、ええ…。父は…」
朋佳は答えに詰まった。
成城の実家を飛び出して、亜里沙のマンションで居候を始めてから、すでに十数日が経過していたからだ。
「ほほほ…、浅尾のおじさまったら。みんなは、ずっとおじさまの到着を待っていたのですよ。先に、乾杯をしませんこと？」
亜里沙が義和に飲み物のグラスを手渡して、上手にその矛先を変えた。
「まったくだ。亜里沙の言う通りだ。義和、そろそろ始めるぞ」
日本での父親代わりであり、常日頃から盲目的に亜里沙の意見を尊重する辰夫が、同調し、催促する。
「うん、そうだな。まず、きちんと乾杯をしましょう」
言いながら、浅尾義和が亜里沙にシャンペンを注いでもらう。
「じゃあ、工藤。音頭を頼む」
三上恵造がグラスを手にすると、辰夫に笑顔で合図をした。
辰夫が、小さくＯＫマークを作って返す。
「では、主催の三上のご指名なので、わしが乾杯の音頭を取らせていただこう」
辰夫が、立ち上がって言った。
県知事である工藤辰夫にとって、こういった祝い事の席上でのスピーチは朝飯前のはずであった。普段は、巧みなユーモアを交えながら要所を締め、会場の客の心をつかむ。そして、豪快に笑って場を盛り上げる。だが、この時の彼はまるで違った。
「和孝の父親の義和の時も、このわしが乾杯の音頭をとった…」
普段とは打って変わって、静かな口調であった。
「二十五年以上も前のことだ…。でも、昨日のことのように覚えている。忘れられない思い出だ。北茨城の川べりで、みんなで有り合わせのものを持ち寄って、義和の初優勝のお祝いをした。下手くそな手料理をふるまったんだ。だが、本当に楽しかった。本当に嬉しかった…」
浅尾義和が、三上恵造が、目をつぶって何度も相槌を打っていた。
「感無量だ…。亜里沙も、謙作も、そして和孝も、わしにとっては我が子も同然だ。いや、それ以上の存在だ。だから、わしは…。わしは、本当に嬉しい…」
そこで辰夫は絶句し、天を仰いだ。
明らかに彼は泣いていた。
義和が、恵造が、辰夫のもとに歩み寄り、三人は再び固く抱き合った。
「おめでとう、義和…」
「よかったな、浅尾…」

「ありがとう…、ありがとう…」
三人の旧友はスクラムのように抱擁し合い、口々に祝辞を、その礼を交わす。
会場を見守る辰夫の警護のＳＰは、驚きを持ってその光景を見ていた。
主(あるじ)のそのような姿を見るのは始めてであった。県警察の最高責任者でもある主は、涙などとは無縁の男だと思っていた。いったい、主の胸に過去の何が去来しての涙かは分からない。固く抱擁し合う三人の男達に、昔どんなドラマがあったのかもわからない。だが、その理由は分からずとも、自分も含めて周りのすべての者に感動を与えているのには間違いなかった。ＳＰは、主が県民の皆に愛され、連続当選している理由が分かったような気がした。
パチ、パチ、パチ…。
亜里沙が、三人に向かって拍手を送った。彼女の目がしらも、真っ赤になっている。
それに、三上夫人が続き、すぐにその場の全員が手を叩いた。ＳＰも職務を忘れて、夢中になって手を叩いていた。

十四．問題点

宴が一段落したところで、公務があった工藤辰夫を除いた一行は、三上邸からほど近いＭＪ社の射撃場へ移動した。
射撃場の向かって左側の方のエリアは、通常通り営業用に開放してあったが、右側の上級者用の方は事前に貸し切りにしてあった。
「じゃあ、私が入りますね」
亜里沙がプーラー室の役を買って出てくれた。
「じゃあ、僕も…」
三上謙作も彼女のあとに続いた。
始めは、浅尾義和と和孝の二人だけがプレーゾーンに入った。
息子の和孝が日本チャンピオンになった暁には、親子二人でお祝いの射撃をするというのが、義和の夢だった。そして、その息子は若干二十二歳にして、それを実現させてくれたのだ。
二人の射撃が始まった。
現チャンピオンの和孝の射撃には、当然のように隙がなかった。教科書のような正確さで、淡々と打ち出されたクレーを粉砕していく。始めのうちはいくつかミスがあったものの、義和の方もしだいに和孝に追いついていく。日本選手権を七回も連続して獲っている彼の並外れた安定感は健在だった。
周囲には、見物客の輪ができ始めていた。
「ははは…、新旧の日本チャンピオンが並んでのプレーとは、また、壮観だなぁ！」
三上恵造がおもわず放ったその言葉は、それを見ている周りの皆の気持ちを代弁していた。
「やっぱり、浅尾先輩って凄いんだね！」
門外漢である五十嵐美穂でさえも、その状況を彼女なりに理解していた。

「うん、本当に…！」
朋佳も、自分が凄い人物に指導してもらっているのだということを改めて実感した。
立て続けに二ラウンドを行ったところで、義和が射台を降りた。
「あれ、お父さん。もう、あがるの？」
若い和孝は、まだまだ気力・体力に満ちている。
「ああ、もう十分に満喫できたよ。それに、平沼さんの射撃もゆっくりと見てみたいからね」
そう言って、義和は、後に控える朋佳に手招きをした。
手早く支度を整えた朋佳が、義和の代わりに射台にあがった。今度は、朋佳と和孝の二人が並んでの射撃が始まった。
「浅尾おじさん、お疲れさまでした」
休憩に入った義和に、三上謙作が持ってきた瓶のドリンクを差し出した。入り口の自販機で買ったチェリオという清涼飲料水だった。
「ありがとう、謙作君。僕は、これが大好物なんだよ！」
義和は手にした瓶をまじまじと見つめながら、嬉しそうに言った。そして、それをゴクゴクと飲み始める。
「うん、これこれ。この味、この味。このチェリオが飲めるのも、ここに来る楽しみのひとつでねぇ！」
一気に、半分くらいまで飲んでからまた嬉しそうに言う。
「ははは…。浅尾おじさんと辰夫おじさんのチェリオ好きの話は、小さい頃から何度も聞いていますからね」
「ははは…、そうだったか」
ペットボトルが主流になり、今では珍しい部類の瓶入りのドリンクであったが、友情の思い出の為にと、オーナーの三上恵造がこの射撃場に置き続けているのだ。
「あれ、そういえば、謙作君。プーラー室にいたんでは？」
と、言いながら、義和がプーラー室の中を見ると、元々いた亜里沙に加えて、いつの間にか合流してきた玉木恭介の姿があった。
「そうなんです。途中で玉木さんが来たんで、替わってもらいました。僕なりに気を使って、二人だけにしてあげたってわけです、ははは…」
「えっ…。つまり、亜里沙ちゃんと玉木君は、そういう仲なのかい？」
「ええ、まあ…、たぶん」
「ほー、そうなのかぁ」
「それよりも、浅尾おじさん。あの和孝の彼女の射撃、どう思います？」
朋佳と和孝の射撃は、中盤に差し掛かっていた。
「うん、そうだな…」
義和が、元日本王者の目に戻った。
「確かに、素晴らしい間合いだ。撃つまでに関しては、申し分がない。独特ではあるが、完全に、自分の間合いを確立させている。それから、クレーのとらえ方も、きちんとしている。でも、ただ一点、気になることがある…」
「ひょっとして、それは、引き金を引く時の不安定さですね？」

慎作がほぼ断定するように訊いた。
「えっ、君もその点に気づいたのかい？」
義和は、驚いた。
「慎作君、君はよくそのことに…」
言いかけて、義和はいったん言葉を止めた。
普段の慎作の射撃の腕前から考えると、そのことにまで気づくはずがなかった。だが、忘れていたあることを思い出すに、そう気づいて当然なのかもしれないと考えを改めたからだ。彼の体に流れるＤＮＡのことだ。しかし、義和はその部分については、この場ではまた忘れていようと思った。
「慎作君の指摘の通りだと思う。彼女が、引き金を引くタイミングにバラツキを感じる。迷いなのか、何かの癖なのか、理由はまだわからないがね。とにかく、引き金を引く時に問題があることは間違いなさそうだ」
「そうですね。あとで、皆で話し合ってみましょう。あれを克服しないと、試合では相当苦労することになりますからね。浅尾おじさんも、同席してくださいね」
「うん、勿論だよ」
それから、一時間ほどのちに、その場の皆で朋佳の射撃についての意見交換を行った。
その時、浅尾義和は思いもよらぬ新たな別の問題を抱えることになってしまった。

十五．土下座

翌日。成城、平沼玄雲邸の茶室―。
「こ、これは、ひょっとして…？」
差し出されたカステラを口にして、浅尾義和が思わず発した。
「さすがに、気づかれましたね」
玄雲が笑顔で言った。
「やはり、これは熊久の…？」
「はい、そのとおりです」
熊久のカステラは、義和の子供の頃からの一番の好物だった。熊久は、江戸時代から二百年以上に渡って浅尾家に出入りする老舗の和菓子屋だった。
「でも、九州の熊久のものが、何故ここに？」
「ははは…。実は、浅尾さんをここにご招待するつもりで、事前に九州から取り寄せておいたのです」
「ええっ。前々から、私を呼ぶおつもりだったんですか？」
義和は二度、驚いた。
「はい。数日前に、内々で奥様にあなたのご予定を伺ったところ、運よく昨日から関東に来られるということが分かったものですから。勿論、とてもお忙しい方ですから、ダメもとで用意だけはしておきました。ですから、昨夜、あなたから会いたい旨のお電話をいただいた時には、内心とてもほっといたしました。茶菓子用のこのカステラも無駄にならずにすみました。まさに、以心伝心って奴ですな。ははは…」

「ははは…、そうだったんですか。それは、私も運が良かった」
「運が良かったのはむしろ私の方です。おかげで、九州まで行かずに済みました」
「えっ、九州までお越しいただくほどの用向きが…。しかも、そんな用意までされていたのならば、そちらから、連絡をして下されば良かったのに…？」
「ははは…。用意はしたものの、なかなか連絡を入れる踏ん切りがつきませんで…」
明らかに、玄雲は言い出しにくい何かを抱えているようだった。
「そんな、水臭い。私達の間柄ではありませんか。それに、危ないところでしたよ。今回の上京は、当初は先生のお宅に寄れる都合がついていなかったのです。たまたま昨日、ある事があって、先生にお会いしなければならなくなり、それで、急遽お電話を差し上げたのです」
「そうだったのですか。それは、本当に運が良かった。…ということは、浅尾さんも私に何か御用がおありなのですか？」
「ええ。実はあるのです。しかも、早急にお話しなければならないことが…」
「その、昨日あった「ある事」に関係しているのですね？」
「ええ、まあ。それが、なかなか話しにくい、込み入った内容でして…」
義和は、昨日の三上邸での出来事を思い浮かべた。
息子和孝の優勝祝いの会は、素晴らしく充実したものだった。多忙の中、九州からやってきた甲斐があったと思っていた。だが、会も終わり、ＭＪ社の射撃場の方に場所を移して射撃を楽しんでいた時、事態は一変してしまった。
和孝や亜里沙そして朋佳の三人から「その話」を聞かされたからだ。本人達からは内密にと言われたそれは、和孝の親として玄雲に話さねばならない内容の話であった。だが、切り出しにくい内容でもあった。
「察するに、かなり難しいお話のようですね。では、私の用件の方からまずはお話ししましょう。それを聞いた後であれば、あなたの用件がたとえどんなに込み入った内容であっても、話し易くなると思いますから」
そう言うと、玄雲が自分の座布団を外し、その場に深く土下座をした。
「浅尾さん、申し訳ありませんでした！」
「げ、玄雲先生。それは、いったい何の真似です？」
義和は慌てた。
事態がまったく呑み込めなかった。
「実は、先日、あなたからいただいた奥高麗を割ってしまったのです」
「奥高麗…。以前、差し上げたあの茶碗のことですか？」
「はい。それです」
奥高麗。それは、安土桃山から江戸初期のほんの短い期間にしか存在しない希有の逸品である。発祥の地に近い土地柄の浅尾家だからこそ入手できたものであった。
「多くの大茶人達が愛したものであり、無論、宗家でも家宝同様に大切にしておりました。それを私は…」
「ははは…、なんだ。そんなことですか。それでしたら、どうか、頭を上げてください。どのみち、私のような凡人には不要の物。私が主人では器が泣きます。あなたのような方に使っていただいてこそ器も喜ぶというものですから」

「あれを頂戴した時も、そうおっしゃって下さいましたね」
「ええ、言ったかもしれません。それに、形あるものは使っていれば、いずれは壊れるものです。その奥高麗も幸せだったと思いますよ。ですから、さあ、どうかもう…」
だが、それでもまだ玄雲は頭を上げようとしない。
「無粋を承知で申し上げますが…。あれは何百万、何千万円の価値のある器。それを、私は…」
「ははは…。先生、本当に無粋ですよ。当家と宗家との深い友情は、その程度の金額などで測れるものではありませんよ」
「温情あるお言葉をありがとうございます。浅尾さんの寛大なお心使いに、心から感謝いたします。しかし、おっしゃるように、使っていて割れたのなら、まだ気持ちが救われる。実は、私が投げて割ってしまったのです」
「ええっ。何故、そんな…？」
再び、義和の頭が混乱した。
「勿論、誓って、意識的に割ったのではありません。無意識のうちにです。その時、ある事に前後不覚になるほどに心が乱れ、気付かぬうちに手にしたものを壁に投げつけていたのです。それが、あろうことか、奥高麗だったのです」
そう言って玄雲は、茶室の壁の一点を指差した。
「なるほど、現場はあそこですか…」
義和が見上げると、確かに薄茶色の漆喰の壁の一か所が、壊れてへこんでいた。
「先生ほどの人格者がそれほど心を乱したとなると、先生の言うところのその「ある事」というのが、どうしても気になってしまいます。よろしかったら、それを話していただけませんか？」
「恥を忍んで、お話しします…」
玄雲は、目を閉じ、沈痛の面持ちで語り始めた。
「実は、先日、娘がこの家を出て行ってしまったのです。理由は、娘がこっそり始めたクレー射撃を私が咎めたからです」
義和が黙って聞いていた。話の内容に無反応なのではない。反応することを表に出せなかったのだ。
「娘があそこまで私に刃向ったのは、生まれて初めてでした。しかも、見たことのないほどの決意の強さでした。それは、この私を圧倒するほどの迫力でした。それで、私は我を失い、この茶室に逃げ込みました。そして…」
説明の途中で、今度は玄雲が慌てた。
義和が土下座をしていたからだ。
「あ、浅尾さん。あなたまで、何ですか？」
「玄雲先生。申し訳ありませんでした！」
「いったい、何のことです？」
「朋佳さんに、そのクレー射撃のきっかけを作ったのは、実は、私の息子の和孝です。しかも、最近では指導もしているとのことです」
「な、なんと！」
「勿論、そのことを知っていれば、私はまず玄雲先生に報告なり、相談なりをしていたと

思います。ですが、それを知ったのは昨日だったのです。それで、あわてて先生に電話をしたのです」
しばらく、茶室に沈黙が流れた。
「浅尾さん。とりあえず、頭をお上げください。それではお話が聞けません。ここを出て、応接間でコーヒーでも飲みながら話すとしましょう」
「ええ。そうしましょう」

十六．何千倍の価値

義和と玄雲は、離れの茶室を出て応接間に移り、ソファに腰かけた。
「この状況ならば、和室と違ってお互いに土下座をしないで済みます」
玄雲が笑みを浮かべて言った。
場所を変えて、少し気持ちが落ち着いたようだった。
「ははは…、確かに。名案でしたね」
義和が、小さく笑って返した。
まだ、話は途中であり、大きく笑う心境ではなかった。だが、確実に気分転換にはなっていた。そこへ、お手伝いの多恵がコーヒーを運んできた。
「さあ、どうぞ」
玄雲に勧められ、義和がコーヒーをすすった。さらに気持ちが落ち着いた。
義和は、さすがだと思った。今、客である自分に振る舞われているのは日本の茶ではない。ある意味、それと相対するコーヒーだ。だが、そのおかげですっかり茶室での重々しさから気持ちが解放されていた。玄雲には、客人をくつろがせ、喜ばす為に、今何をすれば良いのかがわかるのである。その限りにおいては、彼はそれが日本の茶であることにはこだわらない。人をもてなすのを生業とする玄雲ならではの真骨頂であった。
だが、逆に考えると、その玄雲をもってしてでも、我を失わせるほどのことを自分の息子がしてしまったのも事実だった。
その玄雲が口を開いた。
「結果的に、思わぬ展開となってしまいましたが、私はそのことで大切な友人を責めたてる気持ちなど微塵もありません。あなたは先程の茶室で、私に、当家と宗家との深い友情の前には何百万、何千万円の価値のある器ですら何の意味もなさない、とおっしゃって下さいました。今の私も、まったく同じ心境です。ですから、どうかいろいろと気になさらずに、昨日あったことを聞かせて下さい」
「ありがとうございます。痛み入ります。では…」
玄雲の言葉を聞いて、すっかり落ち着きを取り戻した義和が語り始めた。
「事の発端は、息子の和孝が自分の射撃の形について研究する為に、大学の弓道場を訪れることに始まります。そこで、お嬢さんと出会ったのです。それは、まったくの偶然だったようです。二人は、初対面だったとのことです。和孝のあまりの熱心さに、お譲さんもそのうちにクレー射撃というものに…」
玄雲は、深く目を閉じて、じっと義和の話に聞き入っていた。義和の説明が終わっても、

しばらくは目を閉じたままであった。そして、やっと目を開いた。
「浅尾さん。頭を下げなければならないのはやはり、この私の方です。ご子息さんには、何の落ち度もありません。仮に、娘がご子息さんに勧められて始めたのであれば、話は多少違いましょうが、実際はそうではありませんでしたから…。クレー射撃に目覚めたのは、うちの娘の勝手からです。ご指導を受けたのも、なり行き上のことで、ご子息さんの責任ではありません」
「そう言っていただければ、気が休まります。ですが、やはり、きっかけはうちの和孝の方です。あいつが弓道場に行きさえしなければ、お嬢さんには何も起こらなかったわけですから」
「ふふふ…、ははは…！」
それを聞いていた玄雲が、突然笑い始めた。
「えっ、何か？」
キツネにつままれたような面持ちで、義和が訊いた。
「ふふふ…、浅尾さん。そこまでさかのぼってしまうと、今回の原因は私達ということになってしまいますよ」
「えっ、私達に…。どうしてですか？」
まだ、玄雲の言わんとしていることがわからない。
「だって、考えてごらんなさい。あなたのその論理を突き詰めていけば、二人が知り合うきっかけを作ったのは、他の大学には行かせずに学習院大学を無理矢理勧めた親の私達ということになりますよ」
「な、なるほど。確かに、その通りだ。これは、何てこった。ははは…」
「でしょ？　ははは…」
二人は、大笑いになった。
玄雲が言う通り、浅尾家も平沼家も、子供を学習院に入れるのが家の習わしになっていたのだ。
「おーい、多恵さん。コーヒーのお代りを頼みます」
玄雲が、気分よさそうに声を掛けた。
今までの緊張した空気が嘘のように、気持ちが晴れ晴れとしていた。
「やれやれ。悪いのは結局、親の私達の方になってしまうのですかね？」
お代りのコーヒーを口にしながら、義和が苦笑いをして言った。
「ふふふ…。そうなってしまうのかもしれませんな。いや、むしろ、そうなってくれた方が気が晴れます」
「確かに、そうかもしれませんね。私も同感です」
二人の父親は、安堵した。
「浅尾さん。私も、宗家の長としての心の鍛錬は、それなりに積んできたつもりです。ですが、今回の件で嫌というほどわかりました。我が子に関することについては、別物であると。平常心ではいられないと…」
玄雲は、しみじみと続けた。
「幸せになってもらいたいと思うがあまりに、どうしてもそれが過剰気味になり、結果的には色々な場面で自分の考えを押しつけてしまいます。我が家にはクッションの役目にな

る母親もいないものですから、今まで娘はすべてそれを無条件で受け入れるしかありませんでした。私の意見は、大概はおそらく正論ではありますが、しかし、それが必ずしも子供本人にとって幸せというわけではありません。心のどこかで、それはわかってはいるのですが…」
「それは、どこの親でも大なり小なり皆同じでしょう」
「うむ。確かに。ただ、私達には、他の親御さんとは若干違う点があります…」
「といいますと？」
「私と浅尾さんには、大きな共通点があります。私達は、生まれたその時から、家を継ぐという宿命にあります。それが、単なる商店とかの規模であればともかく、いずれは何万人という人間を背負うことになるのです」
「ええ、その通りですね」
「そして、それをまた自分の子に受け継がせなければならない。ですから、好む好まざるにかかわらず、たとえ、それが正しいのかどうかという疑問を持ちつつも、心を鬼にして子に接しなければならない時があるのです」
「痛いほど、わかります。私達も、心では泣いているのです」
「まったくです。肝心の子の方は、そんな私達親の気持ちをどこまで理解してくれているのか…」
「ははは…。まさに、親の心子知らず、ですよね…。しかし、先生。よくよく考えてみれば、そう言う私自身も、若いうちは当時の父親から同じように嘆かれていたと思います」
「そうでしたか？」
「ええ。私も若い頃は、クレー射撃が好きで、好きで、どうしても選手になりたいと当時の父親を困らせていました」
「ははは…。だとすれば、今のご子息さんの状況とまったく同じというわけですね？」
「はい、恥ずかしながら」
「そういえば、何千年前のどこかの壁画の中に、「最近の若い者は…」と当時の大人が嘆く記述があるそうですよ」
「本当ですか。そいつは傑作だ。ははは…」
「でしょう？ ははは…」
再び、二人は笑い合った。
「遅まきながら、今回の件では大いに学ばせていただきました。奥高麗にはすまないことをしてしまいましたが…」
「玄雲先生。そのことは、もうお忘れください。それに、先生。生意気を言うようですが、あなたは奥高麗を失う代わりに、その何千倍のものを手に入れられたのではありませんか？」
それを聞いた玄雲は、一瞬絶句し、そして目がしらを押さえた。
「ありがとうございます。私は、本当に良い友人に恵まれた…」
十徳の羽織が、こみ上げる喜びで小刻みに震えていた。
義和の帰りの時間が迫っていた。
だが、二人の旧友は充分過ぎるほどに充実した時を過ごすことができた。
「ところで、浅尾さん。厚かましついでに、もうひとつお願いごとがあります」

玄関先で見送る玄雲が声を掛けた。
「はい、何なりと。遠慮なさらずに言ってみてください」
「次回、こちらに来られる時で宜しいのですが…」
義和は、玄雲のその願いごとを快諾すると、成城を後にした。

十七．見守る者たち

この日も、ＭＪ社の射撃場には平沼朋佳と浅尾和孝の姿があった。
朋佳は、女子の日本選手権の予選ラウンドに出場し、見事それを通過していた。
そして、二週間後にその決勝ラウンドを控えていた。
朋佳は、田代幸吉によって再び改良が加えられた自分の銃の性能テストに入っていた。
最初の改良は、銃全体の寸法、形を朋佳の体に合うようにする為のものであった。もともとの銃の持ち主が、身長が高く、手の長い亜里沙だったからだ。その改良によって、朋佳の射撃は格段に向上した。今は、それを更に細かく磨き上げていた。
同時に並行して、予備用の銃の製作にもかかっていた。通常、クレー射撃の競技者は予備の為の銃を何挺か用意しておく必要があるからだ。古い銃のメインテナンス・調整と新しい銃の製作を自ら買って出た田代は、忙しい日々を送っていた。しかし、それは久しぶりに充実した日々でもあった。二十一歳の若い女性競技者は、この七十歳を超える名匠を夢中にさせるだけの大きな可能性を秘めていたからだ。
新しい銃の方は、通常７０～８０万円はする高価なものである。恵造は、朋佳の為にそれを二挺も提供した。勿論、個人的に支援してあげたいという気持ちからもある。だが、それだけではなかった。銃関連の企業の経営者として、それだけの価値のあるプレーヤーだと確信したからだ。今回の選手権に初心者の朋佳を出場させることについては、恵造も亜里沙も、そして和孝も、何の危惧もしていなかった。彼女が普段通りの実力を出せれば、予選ラウンドは難なく突破できるはずであった。通常の人間であれば、正式な試合ではなかなか普段の実力を出し切れないものだ。まして、初出場の初心者となればなおさらのことである。だが、朋佳には、弓道で培われた人並み外れた平常心と集中力があった。しかも、それは国体などの大きな舞台ですでに証明済みであった。
そして、結果はその通りになった。彼女は、気負うことなく終始、普段の射撃を貫き通し、関東地区の予選ラウンドをトップで通過していた。
「今度は、どうだった？」
プーラー室から出てきた浅尾和孝が朋佳に訊いた。
「取り回しは、一段とやり易くなりました。これなら、地面を這うような低い弾道にも対応できそうです」
「そうか。じゃあ、今度は低い弾道のを多目にセットして見ようか？」
「はい。お願いします」
二ヶ月半の練習での付き合いは、朋佳と和孝の意志疎通をより確かなものにしていた。今の二人には、無駄な言葉のやりとりは不要になっていた。二人は笑顔を交わすと、それぞれの持ち場に戻った。

その様子を射撃場からかなり離れた後方から見ている三人の男がいた。
オーナーの三上恵造と浅尾義和、そして平沼玄雲である。
「先生。あれが息子の和孝です」
義和が、玄雲に紹介した。
「立派な若者に成長されましたな。しかも、早々と日本チャンピオンにもなられた。実に、羨ましい限りです」
「確かに射撃の腕前の方は、私を追い越す勢いですが、企業グループの後継者としてはまだまだ未知数です」
「まあ、そう急かさなくとも…。その時期がくれば、いずれ自覚が芽生えてくるでしょう」
「はは…。だと、いいのですが…」
「でしたら、うまい提案がありますよ」
恵造が言った。
「いっそのこと、和孝君を私の会社に入れるというのはどうだい？ その時期が来るまでの間、うちで勉強すればいい」
恵造は、半ば本気で提案した。
「そうですね。考えておきましょう」
義和は笑って返した。
「しかし、三上さんには、同じ年頃のご子息さんがいらっしゃるのでは？」
玄雲が訊く。
「いるにはいるのですが、あいつはクレー射撃や銃の製造には、まったくと言っていいほど関心を持ってくれないのです。波乗りばかりに夢中になっておりまして」
「そうですか、それは御心労ですな。しかし、考えようによっては、たとえ親に敷かれた道がどんなに素晴らしいものであったとしても、それに束縛されずに自分の好きな道を選べることの方が、本人にとっては幸せなことかもしれませんよ」
と言う玄雲の答えに、恵造が笑いだした。
「いかがされましたかな、三上さん？」
玄雲が不思議そうに訊く。
「ははは…、これは、失礼しました。実は以前、先生のその言葉とまったく同じことを娘の朋佳さんが私に言ったことがあったものですから。つい、笑ってしまいました」
「朋佳が…？」
「ええ、そうです」
そのやり取りを聞いていた義和が、笑顔で言った。
「なんだかんだ言っても、親子なのですよ。それに、先生は心から娘さんの幸せを考えていらっしゃるのですよ」
「ふふふ…、まあ、そうかもしれませんな…」
義和と玄雲が、顔を見合わせて笑顔で深く頷き合った。
それから、三人は射撃練習を再開した朋佳に視線を戻した。
「どうですか、先生。お嬢さんの射撃は…？」
義和が、静かな口調で訊いた。
「驚きました。クレー射撃なるものは、茶道とはまったく異なる、別の世界のものと決め

つけておりました。ですが、実際はそうではありませんでした。それどころか、とても共通点の多い良く似た世界のものでした。心を静め、時には無に等しい心の静けさを保ちつつも淡々とこなしていく所作。あれは、まさしく茶道の世界に通じるものです」

玄雲は、自分の言葉に頷きながら、続けた。

「娘は、正しい道を選びました。今日は、本当に来て良かった。浅尾さん、連れて来ていただいて、心から感謝いたします」

二か月前に、成城の自宅玄関先で義和に頼んだ玄雲のたっての願いごとが、今日のこの見学であった。義和親子、そして娘の朋佳を、そこまで虜にするクレー射撃というものを実際に自分の目で見てみたい。玄雲は、その衝動に駆られたのだ。

十八・ある癖

港区、広尾―。

夕食を終えた朋佳と亜里沙は、ソファでハーブティーを飲みながらくつろいでいた。

「朋佳さん。今日のあなたの料理の味は満点よ。あれだったら、本物のイタリア人でも満足できるわよ」

「ありがとうございます。本格的なイタリアンを毎日学べるなんて、私、ここに来て本当にラッキーでした」

「あなたさえよければ、ずっとここに居ていいのよ」

「本当にいいんですか？」

「本心よ。そのうちに父が活動を再開すれば、私はここを空けることが多くなるしね。その間、あなたに部屋の空気を入れ替えたり掃除をしていてもらえれば、私の方も大助かりだわ」

「とても嬉しいわ！　私、綺麗に使います。それに、毎日掃除しますから！」

「ほほほ…。その点は、心配していないわ。それに、掃除は毎日なんかやらなくてもいいのよ。馬鹿がつく正直者のあなたは、本当に毎日やってしまいそうだからね」

「そんなぁ、私だって手抜きをすることはありますよ」

「そうかしらねぇ。ほほほ…」

朋佳が、亜里沙のマンションに転がり込んできてから一か月が過ぎていた。

生活を共にしながら、二人はますます心を許しあう仲になっていた。年齢は五、六歳しか違わないが、朋佳は亜里沙を時には姉のように、時には母親のように慕っていた。逆に、亜里沙の方も自分の妹のように、娘のように朋佳に接していた。

亜里沙は、料理が得意だった。特に、イタリアの家庭料理はどれも絶品だった。朋佳は毎日のように亜里沙の料理を教わることができた。一か月前に、成城の実家を飛び出た時の不安感が嘘のように毎日が充実していた。昼間は射撃場で和孝と過ごし、夜は、亜里沙と料理作りに精を出す。朋佳は、生まれて初めて人生を満喫していた。絶対的だと思い込んでいた父親の呪縛から解き放たれ、自分の人生を自分の意志で歩んでいた。

一段落すると、朋佳がビデオのスイッチを入れた。

この数日間、二人が見るビデオは映画やドラマではなかった。先日行われた女子の日本

選手権の予選ラウンドの模様を撮ったものだった。試合会場で浅尾和孝が撮影したものだ。試合経験の少ない朋佳の為に少しでも試合の雰囲気になれるようにとの彼の配慮だった。朋佳はそれを毎晩のように見ていた。試合の流れだけでなく自分のフォームのチェックにも役立っていたからだ。来週の週末にはいよいよ決勝ラウンドがあるのだ。

亜里沙の方も根気よくそれに付き合ってくれていた。

二人が、ビデオを見始めてから三十分ほどが経過した。

そのうちに、亜里沙は、ふと何かの音に気づいた。

大きな音ではない、小さな、しかし一定のリズムを踏んだキンキンというガラス製品を叩くような音だった。それは、モールス信号のそれと似ていた。音の元を辿ると、それは朋佳がハーブ・ティーのティーカップを指先で叩く音だった。朋佳の右手の人差し指の爪先が、持っているティーカップを叩いているのだ。その音は止むことなく、延々と続いていた。だが、本人はそのことにまったく気づいていないようだった。

「朋佳さん。それは、何かの練習なの？」

ビデオの切れのいいところで亜里沙が訊ねた。

「えっ、何のことですか？」

「あなた…。さっきからずっと、人差し指でカップを叩いていたのよ」

「また、やっていましたか…。最近、時々無意識のうちにそうしてしまうんです」

「まあ、さっきだけじゃなかったのね？」

「ええ、そうなんです…」

朋佳の顔が曇った。

明らかに困った様子であった。

「どうして、そうするようになったの？」

「おそらく、引き金のタイミングに悩んでいるからだと思います。頭ではそれを考えていない時でも、体の方が暇さえあれば何かをつかもうと動いてしまっているんです」

「やっぱり田代さんの調整でも、それをカバーするまでにはいっていなかったのね？」

「はい。引き金の重さを軽くしていただいて、まちがいなく以前より良くなってはいたんですが。でも、どうしてもしっくりこないんです…」

「そうかぁ、それは困ったわね。本選まで、もう一週間を切ってしまったし…」

「ええ、そうなんです」

朋佳はそう言いながら、和孝のことを想った。

亜里沙は純粋に、射撃の大会でのコンディションのことを心配してくれていた。だが、朋佳の内心はそれとは少し違っていた。

朋佳は、引き金の感触が定まらないそのこと自体に悩んでいるのではなかった。そのことで、和孝を悩ませていることの方に胸を痛めていたのだった。

十九・到着

千葉県市原市に、その射撃場はあった。

そこで、クレー射撃の日本女子選手権の決勝ラウンドが開催されようとしていた。

浅尾和孝と平沼朋佳は、その駐車場で田代幸吉の到着を今か今かと待っていた。
奥の会場からは、パーンという銃の発射音がひっきりなしに響き渡ってくる。決勝ラウンドの出場者達の練習が始まっていた。
「君の練習の割り当て時間のスタートまで、あとどのくらいかな？」
携帯電話を何度も見ながら、和孝が訊く。
「あと三十分くらいです」
「ＭＪを出た時刻から考えると、もうとっくに着いてもいい頃なんだけど。玉木さんの携帯が全然通じないんだ！」
和孝は、苛立ちを隠せなかった。
「仕方がありませんよ。玉木さんは運転中なんですから、それで出られないんですよ」
「ああ、失敗した。助手席の田代さんの携帯番号をちゃんと聞いておけばよかった。僕は、いつもそういうところが抜けているんだ。くそっ！」
「あなたは何も悪くありませんよ。ぎりぎりまで待ってみましょう」
「で、でも…」
和孝が、自分の為に心を乱していると言うのが目に見えてわかった朋佳は、毅然として言った。
「和孝さん、どうか落ち着いてください」
「う、うん。…でも、昨夜の田代さんのあの自信たっぷりの言葉を聞くと、どうしてもその銃を試してみたいんだ」
田代から、その連絡が和孝のもとへ入ったのは昨夜だった。
調整が間に合わなかった最後の銃が仕上がったというのだ。そして、今回の改良は、あの田代でさえ初めて経験するほどの「劇的な改善」だと言うのだ。
それを聞いた和孝は、どうしてもその銃に賭けてみたくなったのだ。
朋佳が、あいかわらず引き金の感覚の一件を乗り越えられずに来ていたからだ。弓道の所作を取り入れた彼女の射撃法の唯一の欠点が、その部分であった。だが、和孝はそれに対する明確な答えを出してやれなかった。指導者として、力になってやれなかった。そして、とうとうこの日を迎えてしまったのだ。その焦りが、彼の平常心を奪っていた。
予選ラウンドのレベルであれば、その状態でも充分に戦えた。そして、その通りの結果になった。いや、それ以上の結果だった。だが、トップレベルの選手達を相手にする決勝ラウンドではそうは簡単にいかない。今のままでは優勝を争うのは難しい。彼女達と渡り合うには、どうしてもその部分の克服が命題だったのだ。そのことは、朋佳本人が一番わかっており、悩んでいることだった。だが、彼女はそんなことはおくびにも出さず、和孝に優しい言葉をかけ続けていてくれた。
「和孝さん。そのお気持ちは嬉しいんですが、私は、今のままでも、もう充分に満足できているんです。大会はまた来年もあります。仮に、その新しい改良銃が今日は間に合わなくても、私は今の銃で最善を尽くしますから」
「だ、だけど…」
「和孝さん、聞いてください。私が短期間でこの会場に立たせていただいたのも、あなたの熱心で温かい指導のおかげです。本当に、夢のような気分です。そのことで、和孝さんにはこれ以上ないほどに感謝しているんです。だからもう、そんなに自分を責めないでく

ださい」
そう言ってから、彼女は優しく微笑んだ。
「平沼さん。まったく、君って人は…」
和孝はしみじみと彼女を見つめて、言った。
「君って人は…、本当に素晴らしい女性だ」
和孝は、彼女と出会って始めて、自分の奥底の感情を口にした。
だが、それに対する朋佳の反応は意外なものだった。
「ありがとうございます…。でも、せっかく褒めていただいたのですが、その言葉ではあまり嬉しくありません」
「えっ。そ、そうなの？」
「ええ…。「素晴らしい」なんて言い方は、普通の相手に使う言葉です。女の私の心には、響いてきません。かえってよそよそしく感じてしまいます」
「た、確かに。そうかもしれない。でも、それじゃあ、どう言えば…？」
「和孝さんが、普段私に思っている気持ちで素直に表現して下さい」
朋佳の澄んだ瞳の中に、何かの強い意志が宿っていた。
明らかに、朋佳がその場をリードしようとていた。
彼女は、和孝の親友の三上謙作からもらったあるアドバイスを思い出していた。以前、三上恵造邸で行われた身内の祝賀会でのことだ。謙作は言った。和孝という男は、こと恋愛に関してはまったくの奥手だから、もしその時がきたら、こちらから導いてやるしかないのだと。そして、彼女は今が、その時だと直感していた。
「素直に、と言われても…」
和孝が、急にそわそわしだした。
「和孝さん、私を見てください。あなたにとって、私は他の人と変わらない普通の相手なんですか？ クレーを教えているのが、たまたま女であったというだけの存在なんですか？」
「い、いや…。決して、普通なんかじゃない」
「普通でないとしたら、何ですか？」
「特別な人だ。とても…、とても、特別な人だ！」
それを聞いた朋佳の強い瞳の中に、少しだけ喜びが見て取れた。
「もしそうであれば、その特別な人に対しては、他にもっとかけるべき言葉があるのではありませんか？」
「あ、ある。で、でも、それは大切な試合前の、しかも、こんな場所では…」
「いいえ。もし、あなたの心にある言葉が、私の思っているのと同じであれば、今、ここで聞きたいんです。おそらくそれは、私にとっては今日の試合よりもずっと、ずっと大切な言葉になるからです！」
朋佳の強い瞳に、迷いはなかった。
「わかった…」
和孝は、彼女のその言葉に感動し、それに後押しをされるように言った。
それは、この大会が終わってから言おうと決意していた言葉だった。
「平沼さん。…僕は、君が好きだ」

呟くような口調だった。
だが、朋佳を見据えるその表情には、もはや迷いはなかった。
「始めて大学で会った日からずっとだ。世の中に、こんなに素敵な女性がいるのかと思った。ずっと、忘れられなかった」
やがて、和孝の瞳にも朋佳と同じ強さが宿った。
「君が、大好きだ。好きで、好きでたまらないっ！」
「う、嬉しい。その言葉が、聞きたかった…。私も、私も同じ気持ちです！」
気持ちを吐き出し合った二人が歩み寄ろうとした、その時だった。
パパパーっと、クラクションを響かせながら、一台の車が二人の方に向かって走って来た。玉木恭介が運転する車だった。
車が二人の前で停まり、助手席から田代幸吉がゆっくりと降りてきた。
「何だ、二人共。ひょっとして、お邪魔だったかね？」
田代がにやにやしながら言った。
「お、お邪魔なんて、そんな…」
「そうかね。まるでキスでもしそうな雰囲気だったが」
「ま、まさか。ねえ、平沼さん」
和孝は焦って、朋佳に同意を求める。
「ええ…。大事の試合の前に、そんなこと…」
そう言う朋佳の顔は真っ赤になっていた。
「ははは…。それより、おやじさん。時間がありませんから、例のものを」
恭介が、場の雰囲気を切り替えてくれた。
「おう…、そうじゃったな」
田代が恭介に頼んでトランクを開けてもらうと、ひとつの銃ケースを取り出した。
「これですね。例の、「劇的な改善」っていう奴は？」
それを見た瞬間に、和孝の気持ちは完全に切り替わっていた。
「うん。ここでは何だから、どこか適当な場所で」
一行は、クラブハウスの中のロッカールームに場所を移した。
ケースから取り出されたその銃の外見は、他のものとまったく一緒だった。だが、その銃の持っている特徴を田代から聞かされた時、一同は驚愕した。そして、田代から取り扱いの説明を聞き終わり、その場で空の薬きょうを使って何度か試し打ちをしてみた朋佳が、狂喜した。
「こ、これだわっ！」
その声は、ロッカールーム中に響き渡った。
その様子を見ていた和孝は、更に驚いた。
あんなに嬉しそうな顔をする彼女を見たことがなかった。さっきの駐車場での決意の言葉を疑ってしまうくらいに、彼女は喜んでいた。和孝は、少しだけ、その新しい銃に嫉妬を感じていた。

二十・真撃ち登場

決勝ラウンドが始まって一時間ほどが経過した頃、一台のベンツのステーション・ワゴンが駐車場に滑り込んできた。
運転席から二十代のモデルのような西洋人風の女性が、そして、助手席からは五十がらみのこれも西洋人風の背の高い男が降り立った。
二人は颯爽とクラブハウスに向かう。入口にいる大会の運営関係者が、通行証を持っていない二人に声を掛けようとした。だが、その男の顔を見て、あっと、声をあげると、引き留めるのをやめて直立不動の姿勢になった。
「ど、どうぞ。お通りください！」
「うん。ところで君。関係者の席は、どこにあるのかね？」
「このままクラブハウスを抜けますと、出て右側です」
「ありがとう」
二人は、教えられた場所へ向かう。
「だ、男爵だ！」
「男爵が来たぞ！」
途中、すれちがう人が口々に叫んでいた。
それは、クラブハウスを抜けた試合会場の観覧席でも同じだった。観客の中の誰かが、彼の登場に気がつくと、さざ波のようなざわめきが起きる。やがてそれは、どよめきに変わり、ついには大きな歓声の渦になって行った。もし、それが競技中でなければ、その何倍もの歓声と拍手が続いたことだろう。
「じゃあ、お父様。私は、朋佳さんの方へ行ってきます」
「うん、行ってあげなさい。あとで、ＭＪでおち会おう」
小走りに去った亜里沙と入れ替えに、クレー射撃協会の会長が走り寄って来た。
「よくおいで下さいました。お越しになるのなら、ひとこと言っていただければ…」
「会長。突然に申し訳ありません」
「と、とんでもありません。まさか、あなたのような方が、こんな小さな競技会に足を運んでくださるとは…」
「小さな競技会と言っても、国内の女子の大会では最高峰だと聞いておりますが？」
「ま、まあ。それは、そうには違いありませんが…」
「これからは、我々の世界も本格的に女性が参加して来る時代ですからね。私も、母国にどんな逸材が出てくるのかを楽しみにしているのです」
「なるほど。やはり他の国も、女性選手の育成に力を入れてきているのでしょうか？」
「勿論です。イタリアもロシアもアメリカも、皆かなり力を入れ始めていますよ」
「やはり、そうですか…」
「ところで、会長。三上はどこにおりますかな？」
「おっと、これは失礼しました。話に夢中になるあまり、とんだ立ち話になってしまいました。さあ、こちらへ、どうぞ」
会長に案内され関係者席に入った男爵は、協会の主だった役員達と挨拶を交わし、そのあと、三上恵造の隣の席を空けてもらった。協会の理事である恵造は、この競技会の運営委員も務めていた。

「おう、近衛。遅かったじゃないか」
「すまん。最初の方から俺がいると、関係者にも選手にもいらん迷惑をかける恐れがあるので、ぎりぎりに来たんだ。運転手役の亜里沙は始めから見たかったと、ずっと文句を言っていたがな」
「ははは…。亜里沙ちゃんには申し訳ないが、確かに君のその配慮は正解だ。さっきも、会場が異常にざわつくので、選手達に影響が行かないか冷や冷やしたよ。…で、その亜里沙ちゃんは？」
「うん。その平沼さんとやらの方に、慌てて行った」
「そうか。大好きな妹分だからな。心配で仕方がないんだろう。実は、かく言う僕も彼女のそばにいてあげたいのだが、残念ながら、今回はこの大会の委員をやらされているんでな。完全に試合が終わるまでは、声を掛けることすらできんのだ」
「なるほど、それなら仕方がないな。ところで、その彼女はまだ残っているのか？」
「勿論だ。ついさっき終わった準々決勝では、危なげなく勝ち抜いた。今はまだ、残りの準々決勝の組が行われているが、あと一時間ほどで、準決勝だ」
「そうか。大丈夫だとは思っていたが、間に合ってよかった。なにしろ、その為にイタリアから出て来たようなものだからな」
「それだけの期待は裏切らないと思うぞ。とにかく百聞は一見にしかず、って奴だ。一時間後を楽しみにしていてくれ」
「西洋の銃法に、日本の弓道を調和させたというものだな？」
「ははは…。なんだ、ばれていたのか。秘密にしていて、驚かせてやろうと考えていたのに…。亜里沙ちゃんから聞いたのか？」
「いや、二日ほど前に玉木君から聞いたんだ」
「玉木って…、うちの重役の？」
「うん、そうだ。玉木恭介君だ。彼は、実にわかりやすく彼女の射撃法のことを説明してくれた」
「そうかだったのか。確かに、彼はとても勉強家だし、銃に対して頭が下がるほどの熱意を持っている。近頃には珍しい好青年だよ」
「僕もそう感じたよ」
　あの近衛慎一郎が、ひと回り以上も年下の人物をそこまで褒めるのは珍しいことだと、恵造は思った。
「ところで、近衛。この大会が打ち上がった後にＭＪに寄る時間はあるか？」
「もとより、俺もＭＪに行くつもりだった。できれば、その平沼さんも誘ってみて欲しいんだが」
「そうか。それは、いい。彼女も喜ぶだろう。だが、今夜は祝宴になるかもしれんぞ」
「祝宴、何のだ？」
「勿論、平沼さんの優勝のだよ。彼女は今日も、普段と変わらない見事な射撃を維持している。あの感じだと、ひょっとするとひょっとするぞ」
「かなりの可能性か？」
「うん、おおいにある。気のせいかも知れんが、今日の彼女はまた一段と腕をあげているようだ」

「そうか。そいつは、楽しみだ」

二十一．助言した者

三時間後―。

クラブハウスのエントランスは関係者達で賑わっていた。

表彰式が終わるや否や、優勝した平沼朋佳の元へ待ちかねていた専門誌やスポーツ誌の記者達が殺到した。大会前までは、まったくの無名でノーマークだったからだ。そして、新しく誕生したヒロインは、若く美しかった。

三十分ほど経って、取材陣の囲いからやっと解放されると、朋佳はそばで見守っていた亜里沙の元へ走り寄った。そして、二人は固く抱き合った。

抱き合ったまま二人は泣き始めた。大声で泣いた。去来する多くの出来事のひとつひとつが涙を誘って止まらなかった。

傍らにいる男達は、それを笑顔で温かく見守った。但し、正確に言うと、玉木恭介は朋佳に対して、浅尾和孝は亜里沙に対して、それぞれ嬉しさの反面、羨ましいとも思っていた。本来なら、自分が誰よりも先に彼女達をハグしてやりたかったからだ。

そこへ、三上恵造がやってきた。

「やあ、皆さん。お疲れさまでした」

「社長の方こそ、大会運営のお役目、御苦労さまでした。…あれ、男爵は、御一緒では？」

玉木恭介が訊いた。

「ははは…。近衛は、決勝戦が終わると同時に、さっと帰ってしまいましたよ。マスコミに捕まる前にね。彼なりの配慮ってやつです」

「そうでしたか。お話がしたかったのですが、それでは仕方がないですね…」

「残念がらなくても、大丈夫ですよ。彼は一足先にＭＪに向かったんです。向こうで皆を待っているそうです」

「そうですか、それならよかった」

「近衛君がＭＪに来るのか。あいつとは、久しぶりだのう」

田代が懐かしそうに言った。

「彼は、師匠に会うのも、楽しみにしていますよ」

「ほう。それは嬉しいが、いわゆる社交辞令という奴だろう。ははは…」

「いいえ、本当に会いたがっていましたよ。さっき、平沼さんの射撃法にひとかたならず関心を持ったのは予想通りでしたが、近衛は、彼女の使っている銃の方にもかなり関心を持っていましたから」

「ほう、どんな風にだね？」

「詳しくはわかりませんが、何かが違う、とだけ言っていました。僕には、ごく普通の銃にしか見えませんでしたがね」

それを聞いた田代は、浅尾和孝と顔を見合わせてにんまりとした。

「聞いたか、和孝君。近衛君は、感づいたようだぞ」

「さすがは男爵ですね。「あれ」に気づくとは」

「うん。相変わらず鋭い奴だ。まあ、外から見ただけで「あれ」に気づくのは、世界広しとはいえ彼だけだろうがのう。ふふふ…」
「何なのですか、二人で、さっきから言っている「あれ」とは？」
当然のように、恵造がそれを聞きたがった。
「うん。実は、あの銃には、ある秘密があるのだよ」
「ほう、どんな秘密ですか？」
そして、それが明かされる。
「あの銃のトリガー＝引き金は、他の銃と根本的に違うのだよ」
「引き金が…？」
「そうだ。ズバリ言うと、あの銃のトリガーは引くのではなく、離すのだ」
「ええっ、まさか…。引いて弾が発射されるのではなくて、離すと発射されるということですか？」
「その、まさかだよ」
「そ、そんなことが…」
「できないことではない。現に、こうして完成させることができたのだからな。まあ、多少、いつもとは勝手が違うので苦労はしたがな。できなかったのではないのだ。考えつかなかったのだよ」
「それにしても…」
恵造が絶句して、会話が途切れた時だった。
「田代さん。ありがとうございました。おかげで、優勝まですることができました」
平常心に戻った平沼朋佳がやって来て、田代に頭を下げた。
「うんうん。今回は、よく頑張ったな。わしの造った銃で、半年間に二人も日本チャンピオンが生まれるとは、実に嬉しいもんだ」
「本当に、あの銃のおかげです。ありがとうございました」
まだ、赤みを帯びた目で、朋佳が嬉しそうに言った。
「だが、礼には及ばん。わしはそれを形にしただけじゃ。礼を言うのなら、それを考えた人間に言えば良い」
「ええっ。あれは、田代さんが考えたのではないんですか？」
朋佳に代わって恵造が訊いた。
「わしではない。わしでは絶対に思いつかなかっただろう。おそらく、君でも、和孝君でも、最近の玉木君でさえもそうだっただろう」
「といいますと？」
「つまり、銃の常識を知り尽くした我々では一生思いつかなかったということだ。既成概念や固定観念が邪魔をするからだ」
「な、なるほど。確かに…」
「わしも、あの人からそれを言われた時は、頭をハンマーで打ちつけられるような驚きだった。七十歳になっても、まだまだ学ぶことがあるものだとも思った。青天のへきれきと言うやつだ」
「では、その人は銃の門外漢…。関係者以外の人間ってことですか？」
「まあ、そういうことになるな。だからこその発想だよ」

「教えてください、田代さん。その方にもお礼を言わなくてはなりません。それを考えついたのはどなたなんですか？」
今度は、朋佳本人が訊ねた。
「礼を言うのなら、お父様に言いなさい」
「えっ、父に…。何故ですか？」
「ははは…。その引き金の発案者は、誰あろう君のお父上。玄雲先生ご本人だからだよ」
「ええっ、父が？」
明かされた人物の名は、あまりにも意外だった。
「父が…。そんな、まさか…！」
「いや、本当なんだよ。先生からは口止めされていたが、大会も終わったことだし、話してもいいだろう」
田代が、そのいきさつを話し始めた。
「実は、お父上は、朋佳君の練習をこっそりと見に来ておったのだ」
「本当ですか？」
「まあ、本当に？」
再び驚いて、朋佳と亜里沙が顔を見合わせた。
「ああ、それはまちがいなく本当のことだ。実はその時、僕も一緒だったんだ。玄雲先生が友人の浅尾に頼んで、ＭＪに連れて来てもらったんだ」
三上恵造が証言した。
「お父さんと？」
今度は、和孝が驚く。
「そうだ。浅尾が連れて来て、その時に射撃場の案内をしたのが僕だったんだ。だが、玄雲先生には、自分が見に来たことは娘には絶対に話さないでくれと頼まれた。それが知れると、大会直前の朋佳さんの気持ちに少なからず影響を与えてしまうとの配慮からだ。それで、僕と浅尾は先生との約束を守って黙っていたんだ」
「なるほど、そうだったんですか」
「でも、朋佳さんの射撃練習をこっそり見学したその後のことはまったく知らなかった。まさか、あのあと先生と浅尾がＭＪの工房の方にまで足を延ばしていたとは…」
「うむ。玄雲先生は、朋佳君の射撃にとても感激されて、銃の工房の方も見てみたいということになったのだ。自分の娘が選んだ銃というものを、とことん知りたくなったのだろう。言い代えれば、娘のことをとことん理解したかったということだ。実に、実に愛情の深いお方だ」
「父が…」
田代の説明を聞きながら、朋佳は唇を小さく震わせていた。
「ちょうどその頃、わしはその引き金の件で悩んでいた。始めのうちは何とかなるだろうと高を括っていたのだが、いざやろうとしてみると、思いのほか難題だった。その時に、先生が「あれ」を助言されたのだ」
「引き金を「引く」のではなく、弓道の「離れ」のように、「離す」ようにはできないのかと、ですね？」
和孝が言い添えた。

「うむ。そういうことだ。先生は先生なりに娘の窮地を何とかしようと思って、知恵を絞ったのだろう。そう考えると、朋佳君の今回の優勝は、お父上と一緒に勝ち獲ったものだということになるな。実に、良い話だ。ははは…」
「良かったわね、朋佳さん。お父様はもうとっくに、あなたを許していたのよ」
亜里沙が、震える朋佳の肩に優しく手を置いた。
「それどころか、あなたを陰ながら、応援していたのよ」
そう言われた朋佳は、わーっと泣き声を上げて、再び亜里沙に抱き着いた。

二十二．自戒の傷跡

成城、平沼邸―。
過去に、数多くの著名人をもてなしてきた平沼玄雲邸の茶室は、この日、最も若い招待客を迎えていた。
「あれ。これは、もしかして…？」
差し出されたカステラを口にして、浅尾和孝が思わず発した。
「やはり、気がついたかね」
玄雲が笑顔で言った。その菓子に気づいてもらったことに嬉しそうだった。
「やっぱり、これは熊久の…？」
「うん、そのとおりだよ」
熊久のカステラは、浅尾家全員が大好きな菓子だった。
「でも、九州の熊久は東京に店は出していませんよね？」
「ふふふ…。実は、和孝君をここに招待すると決めた時点で、事前に九州から取り寄せておいたのだよ」
「ええっ。本当ですか。僕なんかの為にわざわざですか？」
「わざわざなんて、とんでもない。当然のことをしたまでだ。現役のクレー射撃の日本チャンピオンをお迎えするのだからね、それなりの用意はさせていただくさ。それに君は、私の一番大切な友人のご子息さんだからね」
「ま、まあ、そうには違いませんが…」
「そして、今回君は、この朋佳の優勝の為に大変力を尽くしてくださった。それが、今日お迎えした一番の理由だよ。和孝君、改めて礼を言いますぞ」
そう言って、玄雲が和孝に向かって頭を下げた。
「い、いや。そんな…。玄雲先生、やめてください」
その二人のやりとりの様子を、和孝の隣に座っている朋佳が嬉しそうに見ていた。
「百歩譲って、先生がおっしゃるように、今回の朋佳さんの優勝の一端に僕の貢献があったとしても、最大の貢献者は、玄雲先生の方だと思いますよ」
世辞ではなく、和孝は本心で言っていた。
「僕はもとより、あの田代さんでさえ超えられなかった壁を、先生は見事に超えて見せたんですから」
「あの、離す引き金のことだね？」

「はい、そうです」
「あれは、まあ、門外漢の浅知恵ってやつだよ。娘が困っていると聞けば、親なら何とかしようと必死になるのは当たり前のことだよ。しかし、まあ、君がそう言ってくれるのなら、素直に受け入れるとしようか」
謙遜しながらも、玄雲は嬉しそうだった。
それ以上に嬉しかったのは朋佳だった。あれ以来、父親は自分への愛情表現を素直に表に出すようになったからだ。
「さて、堅苦しい話はここまでにして、楽しみにしていたクレー射撃の話を聞かせてもらうとしよう。応接間に行って、コーヒーでも呑みながらね。何と言っても、現役の日本チャンピオンが二人もそろっているわけだからな」
「確かに、そう言われてみれば。ははは…」
一同は笑って席を立った。
茶室を出ようとした時、朋佳がそれに気づいて訊ねた。
「あら、お父様。これ？」
壁に一カ所、小さなへこみ傷がついていた。
「ああ、それか…」
「前にはなかった傷ですけど、どうされたんですか？」
「うむ、いいのだ。それは、わざと残してあるのだ。自分への戒めというやつだ」
「戒め…、何かあったんですか？」
「ははは…。それは内緒だ」
「ふふふ…、お父様ったら。娘の私にも内緒ごとですか？」
「まあ、そういうことだ。わははは…」
十徳が、晴れ晴れと豪快に笑っていた。

二十三．新天地

半年後―。
イタリア北部。ロンバルディア地方ブレシア―。
平沼朋佳は、両手を空に突き上げて大きく深呼吸をした。こんなにおいしい空気を吸うのは初めてだった。
すべてがよどみなく、透き通っていた。
その高台から見渡す緑地帯と点在する湖とが織りなす景色は、言葉が見つからない程の素晴らしさだった。そしてその背後にアルプス山系を抱く水と緑の美しい風景は、まさに絵葉書の世界だった。以前、亜里沙に見せてもらった写真と同じだった。いや、現実はそれ以上だった。
いつまででも眺めていられると、朋佳は思った。
実際、時の立つのも忘れて、しばらくの間彼女はそこを動かなかった。
「よしっ！」
体と心に新鮮な空気を充分に補充すると、朋佳は立ち上がった。

下まで歩いて降りると、彼女は停めておいた車に乗り込んだ。
目的地まではあとほんの数キロである。ミラノの空港近くで借りたレンタカーは、日本で自分が乗っているのと同じ型のワーゲン・ゴルフだった。運転席の左右の違いを除いては、すべてが同じだったのでまったく不安を感じずに運転できた。
美しい山麓の草原を走りながら、彼女は一年前の決断を思い返していた。常磐道でのあの決断だ。あれが、自分の人生の大きな分岐点だった。あの時の舵取りが、一年後に、自分をこの遥かイタリアの地まで導くことになったのだ。
草原帯を抜けて、ブレシアの市街地に入る少し手前に目指す会社はあった。
ファーマス社の敷地に入り、正面の大きなロータリーの右側にある広い駐車場に車を停める。ロータリーに面して中央にあるのが会社の事務所棟で、左側にある体育館のような大きな建物が銃の製造工場だとわかる。
朋佳が事務所棟に入ると、正面の受付嬢が笑顔で出迎えてくれた。
「こんにちは。今日からお世話になる平沼です」
朋佳は、丁寧な英語でそう話しかけた。
英語が通じなかった場合の為に、あらかじめ用意しておいた同じ文面をイタリア語で書いたメモも一緒に見せる。
それを見た受付嬢は、うんうんと、二度頷いて応えてくれた。
「いらっしゃい、平沼さん。英語で通じていますよ。お待ちしていました。社長との面会までまだ少し時間がありますが、それまでどうされますか？」
受付嬢が英語で返してきた。
「はい、そのことはわかっていて早目に来ました。できれば、事前に射撃場の方を見ておきたいと思いまして」
朋佳は同じように英語で説明しながら、念の為にイタリア語の方のメモをめくって彼女に見せた。
「わかりました。では、射撃場までの地図を描きましょう…」
と言って、受付嬢がそれを描こうとした時だった。
「それならば、私がご案内しますわ」
朋佳の後ろから、誰かが英語で話しかけてきた。
振り向くと、一人の若い女性が笑顔で立っていた。朋佳と同じくらいの年頃の淡いブロンドの美しい娘だった。
そのブロンドの彼女と受付嬢が二言、三言会話を交わした。それはイタリア語だった。どうやら、二人は顔見知りのようであった。
それから、ブロンドの彼女が朋佳に言った。
「私も、これから射撃場に行くところですから、一緒に行きましょう」
「そうですか。では、お願いします」
「私はこのファーマス社の契約選手をしています。ラファエラ・ジオヴァネッティと申します。よろしくね」
そう言って、ラファエラが朋佳に向かって手を差し出した。
「そうなんですか。私は、平沼朋佳と申します」
握手を交わした二人は、すぐに友達になれるとそれぞれに感じていた。

二人は玄関を出た。
「あの…、ラファエラさんは、おいくつなんですか？」
「二十二歳よ。あなたは？」
「まあ、やっぱり。私もです！」
「まあ、そうなんだ。嬉しいわ！」
同い年だとわかり、二人はなおさら親近感を覚えた。
「若いのに、もう契約選手なんて凄いですね」
朋佳が驚いて言うと、
「ほほほ…。まあ、確かにそうかもしれないけど、あなたも凄い逸材だって聞いているわよ」
と、ラファエラが笑って返した。
「えっ、誰がそんなことを言っていたのですか？」
「ここのファーマス社の社長から聞いたのよ。正確に言うと、社長にそう言ってあなたをここに推薦してきたのはあの男爵よ」
「まあ、本当ですか？　そんな話は、今初めて聞きました」
朋佳のたっての願いをきいて、イタリア修行に力を貸してくれたのはＭＪ社の三上恵造と亜里沙のはずであった。
「男爵も、私のことを推薦してくれていたなんて…」
「ほほほ…。どうやら、本人には知らされていなかったのね。いかにも、男爵らしいわ」
ラファエラがまた笑った。
「それに、男爵はこうも言ったそうよ。あなたはいずれ、私の最大のライバルになるだろう、って…」
「ええっ、ラファエラさんの？」
「ええ、そうよ」
「そんな…。そんなのは買いかぶり過ぎです」
「ほほほ…、だから日本人は控えめ過ぎるって言われるのよ。もっと自信を持っていかないと、世界のつわもの達とは渡り合っていけないわよ」
「わかりました。そう心掛けます、ラファエラさん」
「ほほほ…。ラファエラでいいわよ。私達、同い年なのだから」
「そうでしたね、ほほほ…」
「朋佳。私達、いいお友達になれそうね」
「ええ、ラファエラ。私もそう思っていました」
二人は、同じ年齢同士でしかできないような屈託のない笑顔を交わした。
「見えてきたわよ、朋佳。あれが、私達の射撃場よ」
構内の芝生帯の向こうに、美しい射撃場が見えてきた。

了